

第2テモテへの手紙、1章です。前回で第1テモテを終えたところですからまた一区切りと思うかもしれませんが、パウロという人が同じテモテという人に宛てた牧会書簡です。第1テモテ、第2テモテ、ここにはもちろん繋がりがあります。ですから是非第1テモテの内容も、1章から6章まででありましたけれどもそのことももう一度聖霊が記憶を呼び覚まして下さって、そしてこの第2テモテの手紙に入ってもしっかりとそれをベースに読み進めていくことが出来るように祈りつつ臨みたいと思います。これは第1テモテの序論、イントロダクションのところでもお伝えしましたけれども、パウロの絶筆になるものです。絶筆というのはパウロがその生涯において最期に書き記したものです。それを愛するわが子と呼ぶ後継者のテモテへ宛てたわけであります。その内容は個人的であり、そして牧師として、牧会者として注意すべきことを父親から息子に対して語るように手紙にまとめました。最期の言葉ですから、最も大切な言葉と言って良いと思います。重みのある重要な内容だということは皆さんも連想できると思います。死を前にしてその人が、あなたの愛する人が、あなたの敬っている人が、あなたに個人的に語ってくれるわけです。一言も漏らすまいとして皆さんは鼓舞すると思います。自分が最も愛し、最も尊敬するその人が最期の言葉としてあなたに何かを伝えたい。これだけは知ってもらいたい。これだけは忘れないで欲しい。これだけは押さえてもらいたい。そのような言葉が今から見る第2テモテの中にいっぱい見られます。遺言状と言って良いと思います。これが書かれたのはAD67年頃とされています。その年にパウロは皇帝ネロによって断首刑で殉教しています。首をはねられて殉教するわけです。ですからこれが処刑前の最期の手紙です。これはどこから書かれているかと言いますとローマの獄中からです。自分の後継者のテモテに、エペソ教会の若い牧師に、最期のメッセージを手紙に託したわけです。自分が直接伝えられないけれども、手紙で伝えよう。私たちが直接伝えられなくても、直接会えなくても、大切なこと、これだけは知ってもらいたい。わが子よ、我が息子よ、我が娘よ、愛する人よ、その重要なメッセージをパウロは最も辛い中であっても、死を目の前にしても、その劣悪な獄中という環境の中であっても常に愛する者たちのことを思って、心配して、ケアして、彼らはこれからしっかりと私の信仰を継承して主と共に歩んでほしい。私だったら、皆さんだったらどうでしょうか。自分が辛い目にあっているわけです。理不尽な目にあっているんです。言いがかりだとか、濡れ衣ということで罪を着せられているわけです。罰を受けているわけです。苦しい思いをさせられているわけです。理不尽な扱いを受けているのです。ローマの地下牢にブチ込まれてしまったんです。劣悪な暗い穴のようなところなんです。そんなところに投げ込まれたら、通常は恨み辛み、「どうして私がこのような目に遭わなければいけないのか。なぜ私ばかりが。ひどいじゃないですか。私がかわいそうです。」と自己憐憫に陥って自分のことばかりについて考えてしまうかもしれません。でもパウロは違いました。イエス・キリストのようであります。自分が一番辛いのに、自分のことは一切口にせず、他者のためにとりなす。大事なメッセージを身をもって伝えようとする。それがクリスチャンの生き様であります。それがクリスチャンの死に様であります。パウロの生涯においてパウロはローマの獄中に2回投獄されています。一回目は聖書に記録されています。それは使徒28章に記録されています。ただその時は獄中と言いましても、パウロが自費で借りた家にローマの番兵付きの軟禁状態にあったということです。ですからいわゆる牢屋の中にいたというよりも、自分で家賃を払いながらローマの番兵と鎖でつながれた状態でずっとそこにとどめ置かれたということです。軟禁状態、監禁状態、監視付きの生活でしたけれども、パウロを訪問して来る人たちは自由に出入り出来たわけです。パウロ自身は自由にあちこち旅は出来なかったわけですが、ただパウロを訪ねて来る人たちは自由に面会できた。

で、その後パウロは釈放されました。その時の皇帝もネロだったんです。ユダヤ人たちの陰謀によってパウロは政治犯のように扱われたんですけども、パウロはローマ市民権を持っていたので、このことを通して皇帝ネロに訴えて、そのことを福音宣教にも利用しようとパウロは考えたわけです。その時には結局釈放されて、聖書には記録されていませんがキリスト教の信頼すべき伝承によるとパウロはスペインへ宣教に行ったということです。ローマ 15:23 にそのことをうかがわせるパウロの言葉があります。『今は、もうこの地方には私の働くべき所がなくなりましたし、また、イスパニヤに行くばあいは、あなたがたのところに立ち寄ることを多年希望していましたので、』パウロはイスパニヤに行きたい。イスパニヤとは今日のスペインです。スペイン、その時代は辺境の地でした。地中海世界では遠い所に位置したわけです。ですからそこまで足を伸ばして福音を宣べ伝えたいとパウロはそう願ったわけです。で、そのスペイン宣教を終えてもう一度ローマに戻って来ます。ローマがローマ帝国の帝都、首都です。その時に再び捕らえられました。でも、二回目の逮捕は一回目とは違い、それは完全に投獄されるかたち、地下牢に鎖で繋がれて、面会など許されないような。他の凶悪犯と鎖で繋がれるような劣悪な環境に置かれたわけがあります。今日もローマを訪れるとパウロが投獄されていた地下牢を観光のスポットとして見る事も出来ませんが、そのような地下牢においてパウロはこの手紙を書き送っているわけです。もう自分の死期は近い。ネロによって私は処刑されるに違いない。そのことをもうパウロは覚悟してこの手紙を書いています。そこが少し寒いところだったということも第 2 テモテ 4:13 そこを見るとうかがうことが出来ます。『あなたが来るとき（これはテキコというやはりテモテと同様パウロの同労者です。）は、トロアスでカルポのところに残しておいた上着を持って来ててください。また、書物を、特に羊皮紙の物を持って来ててください。』上着を持ってきて下さいということは、そのパウロの閉じ込められていた地下牢は非常に寒い所だったということがうかがえます。そして皆さんも良く知っている狂人皇帝ネロは AD64 年 7 月 19 日、ローマ大火という、百万人都市のローマが炎で包まれてしまう、その事件に関わって恐らくはネロ自身が放火したのではないかとと言われてました。そのローマの大火以降、クリスチャンたちを目の敵にして捕らえては弾圧し、そして処刑まで行なうようになりました。ネロが放火したのではないか。これは噂でありまして、実際に史実かどうか分かりませんが、ただその噂をもみ消すために、火消しのために一生懸命彼はクリスチャンたちにすべてを、責任をクリスチャンたちになすりつけて、濡れ衣を着せて、クリスチャンたちが火を点けたんだ。だって彼らは普段から自分たちが世界の光だと言っているじゃないか。聖霊の火によって。そういう言葉をよく使っているじゃないか。彼らはパンとぶどう酒を飲むことを人の肉と人の血を飲むと、そんなおぞましい人肉を食らうような儀式までも行っている。非常に怪しいカルトのようなグループである。また彼らは互いに愛し合いなさいなどと言って、性的な不道徳も行っているに違いない。そのようなあらぬ噂、根も葉もない噂がたてられて、それをネロが煽動したと言われていました。そのネロによってクリスチャンたちは迫害を受け、そしてそのローマの大火以降表面化していくわけです。あからさまにクリスチャンたちが迫害される。摘発され、逮捕され、そしてパウロと同じように投獄されているわけです。で、見せしめのために処刑されていくわけです。パウロもその中の一人となったわけです。実際に皇帝ネロはクリスチャンたちを蠟の中につけ込んで、そして生きたまま火を点けて、「世の光となった気分はどうだ。」と言って裸になって、自分の庭にそれらクリスチャンたちのろうそくを掲げて自身は馬車に乗ってグルグル走り回りながら、高らかに笑っていたということもエピソードとして残っております。なぜ、ネロはそんなふうになってしまったのか。パウロと個人的に面会した時、それが切っ掛けとなってネロは一気にキリスト教徒に対して態度を硬化させたと言われていました。パウロと出会って以来ネロは気が狂ってしまったというふうに使われています。それまでは比較的穏やかだったんです。そんなにクリスチャンたちを目の敵にしているわけじゃなかったんです。実際に一回目の面会時には穏やかだったんです。使徒 28 章に軟禁状態にあった時の面会。その時は何もなくて釈放されたわけです。でも、二回目の時は違った

わけです。パウロはネロに対して直接福音を伝えたわけですが、でも、明らかにネロは福音を拒んだのです。信じないという態度を表明したわけですが、それ以来ネロはやたらめったらクリスチャンたちを憎むようになったんです。それ以来ネロは気が狂ってしまったと言われていて、で、パウロを断首刑に処して、その翌年 AD68 年にはネロ自身も死んだわけですが、それがこの手紙の背景にある歴史的事実であります。

で、1 章に早速目を移して頂きたいと思います。第 2 テモテの 1 章です。『神のみこころにより、キリスト・イエスにあるいのちの約束によって、キリスト・イエスの使徒となったパウロから、』原文では『パウロ、使徒』というふうに始まるんですけども、日本語の順番で今は見ていきたいと思います。この 1 節の中に神のみこころという言葉が使われていますけれども、パウロは自らを使徒と名乗っていますけれども、一部の人はパウロの使徒職としてのその権威を、その信憑性というものを認めておりませんでした。12 使徒とは違ったということです。実際にパウロは復活の主と出会って、主から直接召されて、キリスト・イエスの使徒となったんですけども、それは沢山の目撃者がいたわけでもありませんし、そこでは他の使徒たちがいっしょになって認証したわけでもありませんから、自称しているだけだと。勝手にそのような作り話をしているだけだと。中々パウロの使徒職を神聖なものとして認めるという者が現われなわけです。逆に彼はキリストを知る前は教会を迫害していたわけですから、なんか怪しい。うさん臭い。使徒を名乗っているけれども、実際にはユダヤ教の回し者じゃないかとか。いつの日か手のひらを返して、我々を一網打尽にするつもりじゃないかと、疑いをかけられたわけですが、嫌疑もかけられたんです。そして他の 12 使徒と比較されて、新参者として軽く扱われたり、馬鹿にされたりしたわけですが、その見た目からも、禿げ上がって、ユダヤ人特有のかぎ鼻で、背骨も曲がっているような、足も O 脚で、目も悪いときていますから、見た目も何となくみすぼらしい。使徒としては立派に見えないわけですが、いろんなことで、そういう非難や批判を受けていたパウロでしたけれども、ハッキリと「私は神のみこころによって召されたんだ。」と。そしてまた同時に「この神のみこころによって私は今このローマの地下牢に閉じ込められている。主の囚人となっている。そしてこれからネロによって処刑されようとしている。これもまた神のみこころである。」と。すべては神のみこころによる。自分が選んだのではない。自分の意志で決定したのではない。すべてこれは主が決められたこと。すべて主が許されたこと。それがまず 1 節で言われていることです。皆さんも神のみこころの内にあるということは、人からの批判や非難、また疑いをかけられたりする時に、ものを言うところであり、すべては主がご存知です。すべては主が許されたことである。人がなんとおもうと、人にどう思われようと、神のみこころの内にあるということは平安があります。もし自分自身が神のみこころの内にあるという確信を持っているならば、何を言われても動じないわけですが、どんな状況に置かれてもビクつかないわけですが、冤罪で罪をきせられて、そしてひどい目に遭っていたとしても。投獄されて、閉じ込められて、鎖で繋がれて、がんじがらめになっていたとしてもです。もしあなたが神のみこころの内にあるという確信を持っているならば、あなたは不平不満や自己憐憫の罪に陥ることはまずないと思います。この神のみこころによりという言葉は非常に大事であります。

次に『キリスト・イエスにある』このフレーズは 1 節の中に 2 回繰り返されています。2 回繰り返されている、しつこいように思うかもしれませんが、2 回繰り返されているということは、それほど大事だということです。但し、写本によっては、最初に出てくる『キリスト・イエス』の語順は、『イエス・キリスト』になっています。異本と呼ばれる写本の異なる本。その中で公認本文と呼ばれるもの。これは英語の欽定訳聖書の底本になっている写本です。そちらの方では『キリスト・イエス』ではなくて、『イエス・キリスト』となっていて、後半の方は『キリスト・イエス』となっています。新改訳聖書は『キリスト・イエス』で統一されていますけれども、公認本文の方では『イエス・キリスト』、そして二回目も『キリスト・イエス』と敢えて順番を入れ替えています。こういう使い方はパウロの他の書簡にも見られます。で、そのところは、前にも話したことがあるんですけども、もちろん無意味なものではなくて、すべては神の

靈感によって書かれているものですから、語順が異なるのもそれなりの意味があるわけです。どちらでもいい、同じことを言っているというだけじゃないわけです。イエスが先にくるということは、“イエス”は個人名です。“キリスト”は肩書きです。それは油注がれた者を意味する、王であり、祭司であり、預言者というその職責、職務を表す言葉であります。ですから、最初にきている『イエス・キリスト』は“イエス”という(ヤーヴェは救いという意味です。)そのイエスと個人的な関わりがハイライトとなっています。後半の『キリスト・イエス』の方は、その職責の方は、その職務の方は、肩書きの方が先にきていますから、それはまさにキリスト・イエスの使徒というふうな繋がりから見てもお分かりの通り、これは重要なミッションということです。ミニストリーということです。キリストも使徒と呼ばれています。ヘブル書では、キリストは父なる神から遣わされた使徒で、12使徒たちのそれこそ模範となるべき最初の使徒となっています。神に遣わされたもの。それが使徒です。ですから、そのキリストとして神に遣わされたその職責を強調したい時には『キリスト・イエス』と。その働きの権威、これを強調したい時。その働きの内容を特に伝えたい時、その時には『キリスト』が最初に使われるわけです。その一方で、イエスが先にくる時には、イエスと個人的な、人格的な、親密な交わりを持っている。その部分が強調されるということを中心に留めておいて頂きたいと思います。ですから、最初は『キリスト・イエス』というよりも、むしろ私は『イエス・キリスト』と皆さんには理解して頂きたいと思います。捉えて頂きたいと思います。

で、そのイエス・キリストにあるいのちの約束によって。イエスがあなたに個人的に約束されていることがあるわけです。先に述べたように、パウロは皇帝ネロに捕えられて、そして今ローマの地下牢に閉じ込められている状態。そして、もう処刑は目前に迫っているという状態。パウロはその死期を予感しているわけです。確信しているわけです。4章6節に既にそのことが書いてあります。『私は今や注ぎの供え物となります。私が世を去る時はすでに来しました。』と。もうこれはパウロが最期殉教しますということを表明しているわけです。注ぎの供え物というのは、旧約聖書の律法にもあります。ぶどう酒を供え物としてささげるといふ、まさにパウロの血がぶどう酒のように注がれる。それが神への生贄、ささげ物となる、そのような死をパウロは覚悟しているわけです。犬死はないということです。死ぬ時もクリスチャンは自らを生贄として、つまり礼拝をささげつつ死んでいくということです。ですから、パウロにとって死は恐れるべきことではないわけです。最後の一息まで神をほめたたえつつ、自らをささげつつ、注ぎのぶどう酒として、すべての自分の体に流れている血が、その一滴一滴が主へのささげ物となるように。最期の一息一息、それもすべて主をたたえるものとなるように。それがパウロの願いでした。なぜそんな驚くべき、力強い勇気を持った最期を迎えることが出来るのか。それはイエスからの個人的な命の約束を信じ切っていたからであります。その命の約束は沢山あるんですけども、有名なものとしてヨハネ 11:25,26 に一つは見られます。弟のラザロを失ってしまったと泣き悲しんでいる姉のマルタに対して言われたイエスの言葉です。妹はマリヤです。ベタニヤのマルタとマリヤです。これはマルタに対して個人的にイエスが言われた言葉。『<sup>25</sup> イエスは言われた。「わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。<sup>26</sup> また、生きていてわたしを信じる者は、決して死ぬことはありません。このことを信じますか。』』皆さんはこのことを信じますか。これがイエスの命の約束です。イエスを信じる者は死んでも生きる。そして、決して死ぬことがない。パウロはそれを額面通り受け止めていたわけです。イエスのこの約束の言葉を信じ切っていたんです。ですから、どんな目に遭おうとパウロは動じなかったわけです。イエスは約束を違えるお方ではありません。クリスチャンは決して死にません。厳密に言うならば、クリスチャンの肉体は滅んだとしても、その霊は決して死なないということです。クリスチャンは死ぬというよりも、この世を去って天国に引っ越すだけの者であります。地上よりも遥かに素晴らしい所に引っ越すんです。ですから、クリスチャンは死をワクワクしながら、期待をしながら、これから新生活が始まろうとしている。もっと良い所に引っ越せるんだと。もうこの朽ち果てる肉体に縛られていく必要はない

んだと。疲れることのない、病気になったり、障害を抱えてしまったり、老化したり、罪を犯してしまうような、この肉体から解放されて、朽ちることのない栄光の体、御霊の体、新しい体を頂いて、これからは誰にも邪魔されずに、罪から解放され、サタンから解放され、キリストを拒絶するこの罪の世界からも解放されて、思う存分永遠に神をほめたたえることが出来る。楽しみで楽しみで仕方がないとして、クリスチャンはこの世を去っていくわけです。もちろん地上で肉の家族と一時的に離れなければいけない。これは多少は寂しいことですが、でも悲観的になることはありません。絶望的になることなど全く考えられないことです。ちょっと寂しいので、しばしの別れというところですが、必ず主にあるものはもっと良いところで再会できるわけです。で、二度と別れることのない、クリスチャンには生き別れないんです。ですから、皆さんも言葉遣いに時々注意しなくてははいけません。「クリスチャンは死んだ。」と言うかもしれませんが、死んだんじゃないんです。生きています。亡くなったと言うかもしれませんが、亡くなってはいないんです。今も生きています。息を引き取った、医学的には心臓が止まった、脳が死んだとか、脳死だとか、いろんなことで呼吸が止まったとか、心肺停止とか、いろんなことで死という表現をするかもしれませんが、ただクリスチャンは、イエスを信じる者は決して死なない。これがイエスの命の約束です。ただ引越ただけだということです。第2コリント4:16から5章にかけて読みたいと思います。『<sup>16</sup>ですから、私たちは勇気を失いません。(これはパウロの言葉です。)たとい私たちの外なる人は衰えても(外なる人というのが目に見える肉体です。足腰も段々衰えてきます。しわも増えてきます。髪の毛も抜け落ちてきます。筋肉も落ちて脂肪ばかりがついてくるかもしれませんが、)内なる人は日々新たにされています。(内なる人というのがあなたの霊の部分です。霊は益々元気になります。)<sup>17</sup>今の時の軽い患難は(そういう考え方を持っている人、そういう価値観を持っている人は、この世での患難を軽いと見るわけです。大したことない。イエスを知らない人たちからしたら、それは大患難だと言うかもしれませんが、クリスチャンにしたらこの地上で味わうことは全部軽いです。逆に今の時の軽い患難は)、私たちのうちに働いて、測り知れない、重い永遠の栄光をもたらすからです。(測り知れない、重い、もっとヘビーな永遠の栄光をもたらす。この地上で体験することが重苦しい、ヘビーだと思っている人は、全然分かってない人です。むしろその患難は軽いもので、でもその軽い患難が実はキリスト・イエスにあっては測り知れない重い永遠の栄光をもたらすんだと。パウロが苦しめられて、パウロが首をはねられて殉教する。その患難。パウロに言わせればそれも軽い患難です。その前にも数々の千辛万苦というような患難、苦難をパウロはずっと耐え忍んできたわけでありました。でもそれは全部永遠にカウントされるんだということです。永遠に価値のあるものに変換される。それをパウロはワクワクしながら、苦しみに押しつぶされることなく、むしろ心は、思いは天に馳せているわけです。苦しめられれば、苦しめられるほど、楽しみが増えるという。それがクリスチャンです。辛い思いをすれば、辛い思いをするほど、それは天において報われるということです。)<sup>18</sup>私たちは、見えるものではなく、見えないものにこそ目を留めます。見えるものは一時的であり、見えないものはいつまでも続くからです。』C.S.ルイスは、目に見えるものは、永遠に続かないものは、役に立たないものだ。役に立つものは永遠に続くものだ、ということを行っています。

で、第2コリント5章1節に『私たちの住まいである地上の幕屋がこわれても(私たちの住まいである地上の幕屋というのはこの肉体のことです。これがこわれても)、神の下さる建物があることを、私たちは知っています。それは、人の手によらない、天にある永遠の家です。』これが私たちの受け取る新しい体があります。これは携挙の時に瞬時に与えられるものです。まずは先にイエスにあってこの世を去った人たち。眠った人というふうにも第1テサロニケ4章に表現されています。まずは彼らから先に体を頂き、そして生きているものが携挙されるならば、その後が続いてこの神の下さる建物、新しい体、朽ちることのない栄光の体を頂けるということです。で、第2コリント5章2節に『<sup>2</sup>私たちはこの幕屋にあって(肉

体にあつて) うめき、この天から与えられる住まいを着たいと望んでいます。<sup>3</sup> それを着たなら、私たちは裸の状態になることはないからです。<sup>4</sup> 確かにこの幕屋の中にいる間は (この肉体の中にいる間は)、私たちは重荷を負って、うめいています。それは、この幕屋を脱ぎたいと思うからでなく (もう死にたい。苦しいからもう早く死にたい。自殺したいと思うからではなく)、かえって天からの住まいを着たいからです。そのことによって、死ぬべきものがいのちのちのまれてしまうためにです。』その後是非読み進めて頂きたいと思います。『そういうわけで、肉体の中にあろうと、肉体を離れていようと、私たちの念願とするところは、主に喜ばれることです。』と。9節にパウロは書いています。最早生き死ににこだわりはないということです。すべては神のみこころである。生かされるのも、殺されるのも、すべて神のみこころである。地上にまだとどめ置かれようと、天に引き上げられようと。どちらも主のみこころならば喜ばしいことである。ただパウロは本音としてどちらかと言えば、個人的には早く天に上げられたいということは正直に言っていますけれども。でも、神のみこころならばそれはどちらでも良いと。私たちはこの世の生に執着してはいないでしょうか。死にたくない。もっと長生きしたい。おばあさんになりたくない。若いままでいたい。もっと元気でいたい。もちろんそう願って悪いわけじゃありません。でも、それに執着しすぎてしまうと、それにあまりにとらわれすぎて、そのために時間を空費したり、労力をいたずらに、金銭を浪費するようなことがあったら、それは残念なことであります。ヘンリー・デービッド・スノーという人がこういう名言を残しています。「人は30歳で成熟し、30歳以降は腐っていく。」腐敗していくという。30歳まで伸び盛り。花を咲かせ、実をつけて、成熟していくわけです。熟れていくわけです。でも30歳以降はどんどん腐っていく。果物のように、果実のように。その通りだと思います。私も40代になってよく分かるようになりました。でも、それは肉体の話をしているんです。肉体は確かにそうだと思います。今は中学生のHちゃんのように伸び盛りという、もっともって背も高くなって、そしてたくましく成長していく。それは肉体において私たちも経験してきたことですけれども、でもあるところから、あるピークを過ぎるとどんどん私たちは衰えていくわけです。背も縮んでいくわけです。でも、素晴らしいことに、この地上における最期の一息は、永遠における天の最初の一息に繋がるということです。最期死ぬ時、私たちもいろんな人の死に目に遭っていると思います。死ぬ時、最期に息を。そのような最期を皆さんも目の当たりにしたことがあると思います。でも、その直後にはその人はクリスチャンであれば、天国で最初の一息をしているんです。最期目を閉じて亡くなって、そして次の瞬間目を開いたらそこはもうパラダイス。次の一息はもうパラダイスで、新しい息吹となっているわけです。素晴らしいですね。最期の一息のその直後の一息は、天での最初の一息になっているんです。最期に目を閉じたら、次に見るものはイエスの御顔です。だから早く天国に行きたいと思うのは、これはクリスチャンとしては自然なことです。命の約束はすべてのクリスチャンに与えられております。この命はこの地上での不老不死の約束ではありません。この命はこの地上よりも遥かに素晴らしい天の都における、父の家における、永遠の命の約束であります。ですからパウロは劣悪なローマの地下牢の中にあつても、勇気を失わなかったわけです。元気はつらつだったわけです。後継者のテモテに最期の重要なメッセージを残すだけの余力は十分にあったわけです。恐らく大分肉体的にも苦しめられ、拷問を受けたり、信仰を捨てるように、キリスト教を棄教するようにいろんな脅しや暴力を受けたと思います。もしかしたら他の囚人たちからもリンチをされたりしていたかもしれません。ろくに食べ物や飲み水も与えられないような劣悪な環境の中にあつて、真っ暗闇の中にあつて、虫の息だったかもしれません。それでもパウロは喜びをもって、「私はこれから世を去っていく。ただ世を去るにあたって、是非私を受けたものを、キリスト・イエスから委ねられたものをあなたにもバトンタッチして継承していきたい。信仰の継承、それが最大の関心事となったわけです。私たちはどうでしょうか。自分の生にただ執着しながら、「死にたくない。死にたくない。」自分がやり残したこととか、いろんな後悔を心の中に思い巡らしながら、「あの時ああ言っておけば良かった。ああやっておけば良かった。」いろ

んな後悔をしながら、自分のことばかり考えながらこの世を去るのか。それとも「もう思い残すことはない。この地上に何の未練も執着もない。ただ私は自分が受けたものを是非愛する息子、娘に伝えていきたい。これだけはしっかりと残していきたい。」目に見える財産、これは一時的なものです。永遠においては何の役にもたちません。でも、目に見えないものならば永遠の価値があります。それは宝と言えるものです。これを私たちは残すべく世を去ろうとしているのでしょうか。このことも考えさせられます。

で、テキストの**第2テモテ1章1節**に『**キリスト・イエスの使徒となったパウロから、**』“イエス・キリスト”ではなくて、“**キリスト・イエス**”の使徒となったパウロから。キリストが肩書きで、職責であります。パウロはキリスト的な職責を受けているわけです。王のような権威も、また祭司のようなとりなし手としての働き、そして預言者として神の言葉を預かって大胆に宣告する、そのようなキリスト的なミニストリーの使徒となった、イエス・キリストに倣う者として、パウロも召されているということをここで表明しています。使徒というのは単純に“遣わされた者、使者、メッセンジャー”です。現代的な表現で言うならば、大統領や首相や王から特命全権大使として遣わされた者。キリストの権威をそのままパウロは特命全権大使として委ねられて、キリストの代表として働いた。これがキリスト・イエスの使徒という意味であります。で、私たちも特命全権大使としてこの世に遣わされているということを覚えたいと思います。かつて教会を迫害した者でも神のみこころによって、神の恵みによって救われ、変えられ、きよめられ、強められ、用いられている。勇気づけられます。励まされます。私のような者でも、あなたのような者でもキリスト・イエスの使徒として召されているわけです。もちろん誤解のないようにして頂きたいと思いますが、パウロや十二使徒たちと同じ意味の使徒ではありません。もう十二使徒というのは今日は存在しません。一部のカルト、モルモン教徒とか、またいわゆる正統派のクリスチャンのグループの中にも、今日も聖書の時代と同じ意味の、同じ同等の権威を持つ使徒が存在するというような教えをしているようなグループもあります。でも、それは非聖書的ですから、誤解しないで下さい。その現代の使徒というのは、聖書を書くことの出来るような権威であると。それはもちろんローマ・カトリックの頂点に立つローマ教皇もペテロの後継者という同じ使徒の権威を持つ者から見なされていますけれども、その使徒はもうこの世にはおりません。この話は今することはしませんけれども、ただ聖書の箇所だけ伝えておきたいと思います。**エペソ 2:20**。今私が話したことがそこに書かれています。『**あなたがたは使徒と預言者という土台の上に建てられており、キリスト・イエスご自身がその礎石です。**』使徒と預言者という土台。これは新約聖書のことを指します。新約聖書は使徒と預言者たちによって書かれました。使徒マタイによってマタイの福音書は書かれました。そして預言者ルカやマルコによってそれぞれの福音書が書かれたわけです。使徒ヨハネによって福音書が書かれた。使徒パウロによって手紙が書かれた。またヤコブやユダの手紙。それらは預言者ヤコブ、預言者ユダによって書かれたわけです。で、それはもう完成しておりますから、その聖書を書く権威を与えられたような使徒はもうこの世には存在しないということです。ただし、神に遣わされていく、厳密な意味では聖霊に遣わされていく使徒たち。使徒とは敢えて呼ばなくても、使者、メッセンジャー、特命全権大使、宣教師のような人たち。彼らは今日も存在し、皆さんもそのうちの一人になれるわけです。これは混同しないで下さい。厳密な意味で私たちは新約聖書の土台となるような、聖書を書く権威を持つような使徒的権威は与えられないということです。ただし、聖霊によって神の国の特命全権大使としてキリストを代表する者として、キリストの証人として私たちは遣わされていく。これは確かなことであります。それが神のみこころであります。

テキストに戻って頂いて、**2節**。『**愛する子テモテへ。**』テモテは恐らくはパウロによってイエス・キリストに出会い、そして改心したと思われます。ただテモテの信仰は後で見ますけれども、お婆ちゃんのロイスとお母さんのユニケからも常に受け継いできたものです。ただイエスを主と心で信じて口で告白する、そのような決心に導いたのは恐らくパウロだったと思われます。ですから、パウロからするとテモテは愛

する我が子になるわけです。自分が直接テモテを導き、そして霊の父として関係を持っていたわけです。そのことはパウロの第一次宣教旅行、第一回伝道旅行の時に起こったと考えられます。第一次宣教旅行の時に、まだその時テモテは 20 代だったと思われれます。少なくとも 10 代後半から 20 代前半だったと思われれます。その時にパウロを通してテモテは改心しました。でも、その時には同時にもう一つ若者を巡る出来事がありました。それはマルコというパウロの同労者。これはパウロの先輩であり恩人であるバルナバのいとこにあたるマルコ、そして**マルコの福音書**を書いたマルコです。彼も若者だったんです。彼も 10 代後半から 20 代だったと思われれますが、既にパウロ、バルナバのその宣教旅行の同労者として、同伴が許されていたわけです。同じく働き人として召されていたわけです。でも途中でこの若いマルコは宣教チームから離脱してしまったわけです。で、第二回伝道旅行、第二次宣教旅行の時にパウロは途中で投げ出してしまった、このマルコの同伴に対して反対して、バルナバと対立してしまった、反目してしまったということが事件として起こったわけです。このことは詳しく**使徒 15 : 36~16 : 3**にあります。で、その際にテモテも救われ、テモテも実はパウロによって同労者として召し抱えられるわけです。興味深いことに二人の若者がパウロと関わりを持つ。一人は、マルコは離れていきます。で、結局パウロとバルナバはもう一緒には宣教旅行に行けないということになって、マルコの処遇を巡って二人は別の道を進むようになります。でもその時にパウロは若いテモテを召していくわけです。かつて第一次宣教旅行の時に救いに導いたあのテモテを今度は自分の片腕として、若者にチャンスを与えていくわけであります。その時にはテモテは恐らく 20 代後半から 30 代、どのように年を取っていても 40 代前半だったと思われれます。ひよっこです。青二才です。若造です。でも、そんな若い者にパウロはチャンスを与えたわけです。若者に神の働きに関わるチャンスを与える。これは実にリスクなことでもあります。リスクの伴うことです。なぜならば若者は失敗するからです。マルコの例もあったわけです。「あんな途中から離脱するくらいだったら、最初からマルコなんか呼ばなきゃ良かった。声をかけなければ良かった。やっぱり若者は使えない。中途半端だ、いい加減だ。弱さがまだある。」ついついそういう失敗例を見ると私たちは若者を登用していくということ、若い人をどんどん教会の奉仕に携わらせていくということに躊躇してしまうかもしれません。でも、パウロはリスクを負ってでも、このテモテを呼んだわけです。声をかけたわけです。召したわけです。私達も若い人をもっと使うべきかもしれません。リスクを恐れずに失敗しても、リスクを負ってでも、それでもテモテをつくるということ、テモテを励ましつつ、テモテを育てていく。それが私たちの、この教会にも求められていることのように思えます。幸い今若い人たちもどんどん奉仕に携わっています。自ら志願して、最年少はもちろん H ちゃんです。主に仕えていきたいと自ら表明しました。親に言われたからじゃありません。実のところは親よりも先に表明してくれたわけです。で、私は喜んで使いたいと思います。失敗するかもしれません。ハメを外すかもしれません。それでも私たちはテモテをつくるべきであります。箴言 14 : 4 にリスクを負ってでも価値のあることがそこに書いてあります。『牛がいなければ飼葉おけはきれいだ。しかし牛の力によって収穫は多くなる。』私たちはきれいな飼葉おけばかりを求めてしまうかもしれません。失敗しない、汚さない、トラブルをもたらさない、散らかさない。でも、そうやっている限りは何も生み出せないということです。若者を登用すれば、若者を召し抱えれば、若者を教会の奉仕に使えば、彼らは確かに失敗するかもしれません。よく失敗するかもしれません。その都度尻拭いをしなければいけないのは、大人の私たち、成熟したクリスチャンたち、指導者であるかもしれません。でも、きれいな飼葉おけのままでは何も生み出せないということです。何の収穫も実りも期待できないということです。マルコの例がありながらも、失敗例もありながらも、その結果それなりのダメージも被ったわけですが、それでもパウロは若いテモテを使うことに躊躇しなかったわけです。若者にチャンスを与えよう。皆さんはもう若くないと思って他人事のように聞いているかもしれませんが、決して自分のことを言われてないと思わないで下さい。皆さんも若くなければなおのこ



と用いられなければいけないはずで、若者にチャンスを与えようとしているわけです。で、若くない人はもう既に働いていなければいけないと言っているんです。人に言われなくてももう既に奉仕をしていなければいけない。神に仕えてなくてはならない。既に若者の模範となってリードしていなければいけないということです。ですから、是非他人事のように私には関係ない、もう手遅れだ、もう年だから、なんて思わないで下さい。逆です。若い人が用いられる前に、もう年っている人は率先して自ら模範を示すように働いていなければならないということを言っているんです。ですから、パウロは度々「私に倣いなさい。」と言ってます。私たちは若者たちに模範を示さなければいけません。「こうやりなさい。私がやっている通りやりなさい。」Y 姉が掃除している姿を H ちゃんが見るわけです。Y 姉が掃除しているように H ちゃんが掃除をすれば良いわけです。分かりやすいですね。ただ口で「あぁしなさい、こうしなさい。」と命じて、指示して、口先だけで指導するんじゃなくて、自らが行っている通りに「この通りやればいい。」と、そうやって模範を示すように私たちは若者たちをリードしていかなければいけません。

で、そのような若者に対してパウロはこの手紙を書いています。続きを見て下さい。**2 節**の続きです。『父なる神および私たちの主キリスト・イエスから、恵みとあわれみと平安がありますように。』パウロはテモテにとって霊的な父親でありましたけれども、でもパウロとテモテにとって共通の父は、天の父であります。父なる神および私たちの主キリスト・イエスから。ここには主という神の個人名、旧約聖書でいうところの“ヤーウェ”です。イエスと父なる神は三位一体の神として同等のお方であります。並ぶお方あります。で、キリスト・イエスはキリストから先にきていますから、そこには肩書き、職務が強調されています。父なる神と、子なる神キリスト・イエスから私たちは恵みとあわれみと平安を受けなければ、何一つやっていけないということも知らなくてはなりません。主に仕える上で、教会で奉仕をする上で、宣教活動にたずさわる上で、私たちはこの父と子から恵みとあわれみと平安を受けなければ、何もやっていけないということです。パウロの通常の手紙は教会に宛てられています。その際には決まり文句として、決まった挨拶として、恵みと平安があなたがたにありますようにと。ただ、ここでは“あわれみ”がその間にきています。第一の手紙でも同じ挨拶を私たちは見て、その時も同じことを指摘しました。“恵み”というのはどちらかというとギリシャ人の挨拶、“ハリス”という言葉です。これはギリシャ人の挨拶。そして“平安”、これはユダヤ人の挨拶、“シャローム”がそれに相当します。でも、その間に“あわれみ”が入っています。通常は恵みと平安がありますように。恵みを経験したものは平安を経験出来るわけです。平安と恵みという順番にはなりません。でも、その間に“あわれみ”があるのは注目すべきことです。これは思い出して下さい。若者であるテモテへの挨拶です。若者には恵みと平安だけではなくて、あわれみが必要です。なぜならば若者はハメを外すからです。若気の至りという言葉があります。よく失敗するということです。若者はついつい軽はずみなことをしてしまいます。若者は向こう見ずなところがあります。何も考えずに思いついただけでパッとやってしまう。パッとやってしまう。よくよく失敗するわけですが、そういう若者には常にあわれみが必要です。皆さんも子育てをしてきてますから、これは分かると思います。子どもたちにはあわれみが必要です。よく間違えを犯すからです。あわれみとは、当然受けるべきものを受けないことです。罰せられて然るべきところを罰せられないわけです。若者には何よりもあわれみが必要です。あわれみをもって若者を育てなければいけません。あわれみをもって子育てをしなければいけません。若いから特にあわれみが必要なんです。で、恵みは当然受けるべきでないものを受けるわけです。恵みと平安が必要なのはすべての人において共通ですけれども、特に若い人にはこのあわれみが必要とされているということです。前提としてよく失敗するということが示唆されています。あわれんであげなさい。そして若者たちもこのあわれみを、特に神の働き人は。教会を育てる、牧会者として羊を育てる、一人ひとりをまさに子育てするように育てるわけですから、あわれみが必要である。牧師にはあわれみが必要です。子育てにはあわれみが必要です。人を育てる際には、このあわれみは欠かせないものです。第

子訓練、disciple ship そこにあわれみ。これが欠けてはいけません。人を訓練するというのは常に厳しいことを言うことですが、厳しいことを要求することですが、でも、あわれみがなければ、人は育たないということです。あわれみがなければ、切り捨てられてしまうということです。続けられないということです。

で、3節に目を移して下さい。『私は、夜昼、祈りの中であなたのことを絶えず思い起こしては、先祖以来きよい良心をもって仕えている神に感謝しています。』夜昼パウロはテモテ個人のために祈ってるんです。日の当たらない地下牢ですから、いつが夜でいつが昼か分からないかもしれませんが、とにかく24時間祈っているということです。パウロはローマの地下牢にいます。獄中にいます。最も劣悪な環境にいます。自分が罪を犯したから、自業自得でそこに投げ入れられたのではありません。完全に理不尽な扱いを受けたんです。キリストの名において語っている、その福音宣教のゆえにパウロは囚人となったわけです。そして拷問され、まさに処刑されようとしているわけです。他の凶悪な犯罪者と鎖で繋がれているわけです。眠れぬ夜もあったと思います。私だったらどうかと思います。あなただったらどうでしょうか。不平不満を言っていないでしょうか。「夜眠れない。何故私が。惨めだ。何故こんな目に。」恨みや辛みばかりを口にしていたかもしれません。眠れない時、悶々として。でも、パウロは違いました。夜昼テモテのために祈っていたんです。眠れぬ夜は祈りの夜に変えていたわけです。徹夜祈祷会に変えていたんです。その牢獄はパウロにとって祈りの家となっていたわけです。是非このことを自分自身にも適用して頂きたいと思います。閉じ込められてしまっている。鎖で繋がれて身動き取れずに不自由な状態、自由にできない状態。まさに牢獄状態。それは私の結婚生活ですと、あなたは言うかもしれません。「もうこの人と結婚しちやっただから、クリスチャンになっちゃったから、もう離婚も出来ないし。」なんて思っているかもしれません。腐れ縁だと。「この人と一生鎖で繋がれていかなければいけない。私の結婚生活はまさに牢獄生活といっしょです。」夜、腹がたって腹が立って眠れない時。何故こんな人と結婚してしまったのかと後悔して眠れない時。その伴侶からひどいことを言われ、ひどい態度をとられ、ひどい仕打ちを受け、涙せずにはいられないその夜も、パウロと同じようにあなたは祈ることが出来るんです。夜昼関係なくです。するとあなたもパウロのようにどんな辛い目に遭っても、たとえ死を目前に迎えても、喜びと期待と希望と平安をもって過ごすことが出来ます。最期の瞬間までそのように過ごすことが出来ます。そして他の人にも声をかけてあげたり、愛のメッセージを送ってあげたり、余裕が生じます。自分のことはいっぱいいっぱいじゃないんです。自分のことばかり考えるんじゃないんです。自分自身という牢獄からも解放されるわけです。そして家事をしながら、ご飯を作りながら、洗濯物をたたみながら、祈ることが出来るんです。夜昼となくです。あなたの家は祈りの家となるわけです。仕事に縛られているという人もあるでしょう。「いつもプレッシャーなんです。本当は辞めたいんですけども、辞められない事情があるんです。家族を養わなければいけない。又はこんな仕事、本当はやりたくはないけれども、でも仕方がない。食うためには。毎日毎日機械的なことの繰り返し。退屈でならない。全然エキサイティングじゃない。つまらない。縛られてしまっ。」でもあなたはその退屈と思える一つ一つの仕事、それは何も頭を使うような仕事じゃないかもしれません。でもその一つ一つの仕事をしながらあなたは祈ることが出来るんです。夜昼となく祈ることが出来ます。誰かのために、他者のために、とりなしの祈りをささげることが出来るわけです。夜眠れなくても祈れます。昼間忙しくても、「縛られているな、窮屈だな、退屈だな。」と思えているその時でもあなたは祈ることが出来るんです。よくよく考えれば、もうこの世自体が、この世界そのものが牢獄と同じです。私たちはこの肉体に縛られています。肉体を離れて生きることは出来ません。この世を離れて生きることは出来ません。肉体は罪の性質を持っています。常に肉欲に駆られます。常に罪に魅了されていきます。御霊の求めるものとは正反対のものを求めていくわけです。矛盾があります。葛藤があります。対決があります。この世も罪の世界です。キリストを拒絶する世界。神を愛していない人た

ち。神を愚弄<sup>ぐろう</sup>する人たち。クリスチャンを迫害する者たち。神を神とも思わないような傲慢な人たちが周りにいっぱいいます。不正がまかり通っています。正直者がバカを見る世界です。もうこんなところに居たくない。でもそこに私たちは留め置かれているわけです。その意味においては、私たち全ては牢獄に閉じ込められているわけです。望んでいるんじゃないんです。本当はここから出たいわけです。でも、もしあなたが、私が、パウロと同じようなメンタリティーをもって、夜昼となく祈るならば、全く世界は変わるということです。一変するということです。このことは、パウロがピリピの監獄で実行したことであります。同じような目に遭って投獄されましたけれども、獄中の真夜中にパウロとシラスはそこで賛美を始めたわけです。賛美も出来ます。祈ることも出来ます。たとえあなたが牢獄に居てもです。鎖で繋がれていてもです。柵<sup>しがらみ</sup>だとか、腐れ縁だとか、いろんなものに縛られていてもです。いろんな義務や義理に縛られていてもです。それでもあなたはそこで祈ることが出来ます。賛美が出来ます。それにしても、パウロが、あのパウロが、あの偉大な使徒が、あのスーパークリスチャンが、新約聖書の大半を書いたあのパウロが、個人的にテモテのために夜昼、24時間と言って良いと思います。いつも祈っていてくれた。これは凄いことですね。素晴らしいことですね。うらやましいですね。パウロがあなたのために夜昼となく祈っているということを知ったらどうでしょうか。凄いなと思うでしょう。心強いと思うでしょう。あのパウロ先生が私のために毎日祈ってくれているなんて、夜も真夜中でも一睡も出来ない時も、私のことを思い出して祈ってくれている。何と有り難いことかと、皆さんは思うと思います。そしてテモテのことをうらやましく思って、「本当にラッキーだな、彼は。」と思うかもしれません。幸運だなと思うかもしれません。でも、それは間違いです。なぜならば聖書によればパウロよりも遥かに偉大なお方、パウロを遣わしたその主イエス・キリストご自身が私のために、あなたのために、夜昼となく祈っていて下さる、とりなして下さる、ということを知っているからであります。テモテがうらやましいなんて思っていたら大間違いです。ローマ 8:34 には『罪に定めようとするのはだれですか。死んでくださった方、いや、よみがえられた方であるキリスト・イエスが、神の右の座に着き、私たちのためにとりなして下さるのです。』はっきりと「イエス・キリストが、神の右の座に着き、私たちのためにとりなしの祈りをささげておられる。」ということが書いてあります。またヘブル 7:25 にはこう書いてあります。『したがって、ご自分によって神に近づく人々を、完全に救うことがおできになります。キリストはいつも生きていて、彼らのために、とりなしをしておられるからです。』キリストは今も生きて、彼ら（私たち）のために、とりなしし続けて下さっています。夜昼となくです。文字通り、永遠にということです。詩篇 121:3~4 『<sup>3</sup>主はあなたの足をよろけさせず、あなたを守る方は、まどろむこともない。<sup>4</sup>見よ。イスラエルを守る方は、まどろむこともなく、眠ることもない。』私たちの主は、まどろむこともない。うとうととしてしまったり、居眠りすることもないと言っているんです。いつも目を覚まして 24 時間どころか、永遠において、決して私たちを忘れることなく祈り続けて下さっています。私も毎日祈っています。この教会の人たちの名前を挙げて、祈りのリストをもって祈っています。でも、夜になると時々うとうとします。祈りながら寝てしまうこともあります。でも私たちの主は、私たちの大牧者は、そうじゃないということを知って下さい。安心して下さい。今皆さんが目の前にしているこの牧者はまどろむことがあります。この牧師は居眠りすることもあります。でも主は、私たちの大牧者は、決してまどろむことはありません。決して眠ることもなく、とりなしが途中で止んでしまうとか、祈りが途中で止んでしまうということは、決してないということです。どんな瞬間でもイエスはあなたのために祈っています。今もイエスは、今もあなたのために祈っているんです。これを皆さん信じているのでしょうか。このバイブルスタディーに参加して、みことばを聞いてノートに取っているあなたのためにイエスは祈っているんです。あなたがひとりぼっちだと思っているその時もイエスは祈っているんです。誰にもこの気持ちを分かってもらえない、そう思っているその時もイエスはあなたのために祈っているんです。牢獄の中で、何で私だけこんな目に、と思ってい

るあなたのためにもイエスは祈っているんです。決してこのことを忘れないで下さい。誰も私のために祈ってくれないなんて、そんな悲しい言葉を漏らさないで欲しいと思います。それはハッキリ言って不信仰の言葉です。あなたの周りにいる兄弟姉妹、あなたの教会の牧師も、あなたのために祈ってくれない、としてもです。イエスだけはあなたのために祈り続けておられるということ。これだけでも私たちは十分です。もちろん誤解しないで下さい。この教会の MGF のメンバーは神の家族ですから、あなたのためにも祈ってくれます。あなたはその人のことなんか全然思いもせず、考えもせず、その人のためには祈らず、ただ「私のために祈ってください。祈って下さい。」と自分のニーズだけを訴えて、人のためには一つも祈らないあなたのためにも、この教会のメンバーの忠実な人たちは祈ってくれています。でも、それ以上に忠実な大祭司が私たちに与えられているということを決して忘れてはいけません。

テキストに戻りたいと思います。3節。『先祖以来きよい良心をもって仕えている神に感謝しています。』とパウロは言っていますが、この先祖というのはパウロにとってはユダヤ人の先祖ということです。で、『そのユダヤ人の先祖以来きよい良心をもって』と言うこの“きよい良心”とは一体何を意味するのか。ユダヤ人のもつきよい良心ということになります。『良心』という言葉は英語では“conscience”という言葉ですが、第1テモテの中にも多用されていました。箇所だけ言いますから皆さん思い出して下さい。第1テモテ 1:5 (『この命令は、きよい心と正しい良心と偽りのない信仰とから出て来る愛を、目標としています。』)、そこでは“きよい心と正しい良心”というところに使われています。また第1テモテ 1章 18, 19節 (『<sup>18</sup> 私の子テモテよ。以前あなたについてなされた預言に従って、私はあなたにこの命令をゆだねます。それは、あなたがあの預言によって、信仰と正しい良心を保ち、勇敢に戦い抜くためです。<sup>19</sup> ある人たちは、正しい良心を捨てて、信仰の破船に会いました。』) そこでは“正しい良心”という言葉が2回繰り返されています。この“正しい良心”をもって、この信仰の戦いを勇敢に戦い抜きなさい。信仰の破船に会ってはいけなと。そのために“正しい良心”が不可欠だとパウロは言っています。また第1テモテ 4:2 (『それは、うそつきどもの偽善によるものです。彼らは良心が麻痺しており、』) そこでは、惑わす霊と悪霊の教えという違った教えをもって信仰から離れるように誘惑する人たちの、その彼らの、偽教師たちの、偽使徒たちの“良心が麻痺している”という表現です。良心という言葉が多用されていました。同じくパウロが書いたローマ 2:14, 15 (『<sup>14</sup> 律法を持たない異邦人が、生まれつきのままで律法の命じる行ないをするばあいは、律法を持たなくても、自分自身が自分に対する律法なのです。<sup>15</sup> 彼らはこのようにして、律法の命じる行ないが彼らの心に書かれていることを示しています。彼らの良心もいっしょになってあかしし、また、彼らの思いは互いに責め合ったり、また、弁明し合ったりしています。』) そこを参照して頂くとパウロが先祖以来のきよい良心とはどういうものか、ある程度分かると思います。律法をもたない異邦人の中には神が良心というものを植え付けて、その良心が善悪を判断したり、そこで葛藤を感じたり、責めたり、弁明し合ったりというようなことをさせているんだと。これは神が植え付けた、インプットしたものだと言っています。その一方でユダヤ人は異邦人とは違って特別である。なぜならば彼らにはその心の板に律法、神の教え、神のことば、聖書のことばそのものが、インプリントされているから、インプットされているからということということです。ですから、パウロがいうところの“先祖以来のきよい良心”というのは、ユダヤ人にとっては神の律法、トーラーそのものです。でも、神のトーラー、たとえばモーセの十戒、社会の基盤になるような、法律の基盤になるような戒め、教えですけれども、それはこの世界でも通用するもの。キリスト教国家でなくても、この日本においても十戒はこの社会において重要視されるもの。常識として受け止められるものです。それは確かに基準となるもの。これに反することが間違っていると、ノンクリスチャンでも、異教徒でも賛同できるところだと思います。でも、ユダヤ人には明確な律法、それがユダヤ人のきよい良心というものです。与えられています。で、“良心”という言葉はギリシャ語で『スナイデシス』“suneidesis”と言って、原意は『共に見る』という言葉です。See together

若しくは『別の誰かと共に知る』”to know with others”これが良心、ギリシャ語の『スナイデシス』の語源です。でもこれはギリシャ語から派生したラテン語にしても、英語にしても実は同じ意味合いとして使われます。”conscience”という言葉も実は同じ原意を持っています。誰と共に見るのでしょうか。誰と共に知るのでしょうか。ひとりじゃないんです。これはもちろん私たちには分かっていますね。神です。神と共に見る。神と共に知る。それが良心です。神抜きに見ると良心が痛むわけです。神抜きに知ろうとすれば呵責が起きるわけです。神様も見ているとなると、私たちは悪いことはしません。神様と共にいることが意識される限りは、それが聖書で言うところの良心です。私たちは間違いを犯すことは大分減ると思います。端的に良心とはそういう意味です。神が良いと思われること。神が正しいと思われることを、それを常に行っていくということ。そうすれば私たちは良心に従って、神に喜ばれる選択をし、神に喜ばれる歩みをしていくことが出来ます。でも、これが汚されていくと、麻痺していくと、神抜きで、神なしで、または神とは別のものと一緒に、肉の自分と一緒にとか、またこの世の人たちと一緒に、この世の考え、スタンダードで物事を見ようとしたり、物事を知ろうとする。それは良心が正しくない、良心が汚れている。そして何の罪の意識も持たなくなれば完全に良心が麻痺してしまうという状態に陥るわけです。その良心をもって仕えていくということ。私たちも常に神と共にいることを意識して、神に仕えていくことが必要です。誰も見ていなくても、神は見ています。誰も見ていなくても、あなたがゴミ拾いしている姿、教会の掃除をしているその姿。この教会で私たちがただで受けているもの、自分が犠牲を払わなくても、楽しみ、喜び、エンジョイしているもの、それは誰かが備えてくれているわけです。もちろん神様が彼らを使って備えて下さっているんですけども、そうしたもののひとつひとつを神が見ているところで彼らは行っているわけです。だから、人に見られなくても喜びをもって続けられるわけです。神は知っています。誰も知っていなくても神は知っています。これは良い意味です。悪い意味では、あなたが悪いことをしているのを神は見ています。誰も知らないと思ったら大間違いです。隠れたところでコソコソ、人目につかないところでコソコソとやっていることは、全部神は知っています。見ています。で、それが分からなくなったらあなたの良心は完全に麻痺しているということです。その状態では神には仕えられません。きよい良心がなければ神に仕えることは出来ないんです。人に見られていようと、見られていまいと、神に見られていること、隠れたところで見られる神に対して私たちが奉仕をささげなければ、それはきよい奉仕になりません。

で、4節。『私は、あなたの涙を覚えているので、あなたに会って、喜びに満たされたいと願っています。』今パウロとテモテは離れ離れです。パウロはローマの獄中。テモテはエペソ、今日のトルコにいるわけです。パウロとテモテが分かれた時、その時テモテは泣いたということが分かります。どういう涙だったかは分かりませんが、とにかく男なのに泣いたんです。お別れの時です。使徒 20 : 36~38 のところでパウロがエペソの教会の長老たちにお別れのメッセージを告げていく場面があります。そこで長老たちは泣いています。『<sup>36</sup> こう言い終わって、パウロはひざまずき、みなの方とともに祈った。<sup>37</sup> みなは声をあげて泣き、パウロの首を抱いて幾度も口づけし、<sup>38</sup> 彼が、「もう二度と私の顔を見ることがないでしょう。」と言ったことばによって、特に心を痛めた。それから、彼らはパウロを船まで見送った。』とあります。皆は声をあげて号泣したわけです。全員男性です。男泣きです。もちろん周りに女性たちも居たと思いますから、女性たちは素より男も泣いたわけです。声をあげて泣いたわけです。感情表現、それは男にとっては苦手かもしれませんが、でももちろん泣いても良いんです。無理に感情を押し殺す必要はありません。泣きたい時に泣くこと。それは常に許されることです。もちろん涙にもいろんな種類がありますから、自分のために泣くとか、ただ単に感情的になって泣くとか、希望を失って失意の内に泣くとか、そういう涙は肉的な涙と思われかもしれませんが、ただ私たちは感情的な存在としてつくられていますから、喜んでも悲しんでも良いわけです。怒っても良いんです。ただ罪を犯してはならないと言われているだけですから、感情を

表現するのは、喜怒哀楽はこれは神様が与えて下さったものです。これを肉的に暴走させなければ良いわけです。私たちが豊かな感情を表現できる教会でありたいと思います。だからといって、いつもビービー泣いていて良いということではありません。若い牧師テモテは**第1テモテ6:11**（『しかし、神の人よ。あなたは、これらのことを避け、正しさ、敬虔、信仰、愛、忍耐、柔和を熱心に求めなさい。』）では、パウロにして“神の人”と呼ばれています。これは前回の学びでも、“神の人”と聖書の中で呼ばれている人は数少ない指折りだと言って説明しました。これは特殊なことです。素晴らしい称号です。“神の人”滅多にそう呼ばれません。でも、その“神の人”と呼ばれるこのタイトル、称号から私が連想するのは、非常に大胆で、勇敢で、男らしく、<sup>たけだけ</sup>猛々しい、大胆不敵というそういうイメージを持つかもしれません。パウロをイメージするかもしれませんが、でもテモテは泣いたんです。パウロが泣いたという記事は聖書にはありませんけれども、テモテは間違いなく泣いたんです。で、**第1テモテ**でも私たちは学んできた通り、テモテには数々の弱さがありました。神の人なのに泣く。神の人なのにいろんな面で弱さを抱えていたわけです。胃が弱かったんです。胃弱、虚弱体質だったんです。だから胃薬を飲まなければ、日常生活にも支障があった。そういう虚弱体質だったわけです。常に胃がキリキリして痛い。いろんなストレスを抱えて。長老たちの顔色を見ながら、また一般の教会員との間に立って。中間管理職のようにいろいろとテモテは悩んだわけです。年が若いからといって軽く見られたこともあったわけです。生意気なやつめ、若造のくせに、何の経験もないくせに。パウロと別れる時だけ泣いたのではないかもしれません。テモテは夜な夜な泣いていたかもしれません。これは私にはあまりにも重すぎる。とてもじゃないけど、このエペソ教会をまとめることは私には荷が重すぎる。そういう弱音を吐いていた、そんな彼の姿が**第1テモテ**の中にもチラホラと見受けられました。で、この**第2テモテ**にもそのテモテの弱さを少しうかがわせる箇所があります。ちょっと先に見ますけれども**7節**に『神が私たちに与えてくださったものは、おくびょうの霊ではなく、力と愛と慎みとの霊です。』とあります。これはもちろんテモテが臆病風に吹かれていたということ。パウロは前提にしているわけです。あなたはおくびょうの霊をうけたのではないと。気弱だったわけです。弱気だったんです。実際に**2章1節**ではこうも言っています。『そこで、わが子よ。キリスト・イエスにある恵みによって強くなりなさい。』強くなりなさいと命じられているということは、弱かったということが示唆されています。弱いから強くなりなさいと言われてるんです。強い人には強くなりなさいとは命令しません。ですから、テモテは非常に弱気になっていた。臆病風に吹かれていた。長老たちからも見下され、パウロは年が若いからといって軽く見られないようにしなさいと命じていたわけです。泣き虫になっていたわけです。『私は、あなたの涙を覚えているので、あなたに会って、喜びに満たされたいと願っています。』とにかくパウロはテモテを励ましたかったわけです。テモテにローマにまで来て欲しいと。自分が行けないわけですから、テモテに来て最期一目でも会いたい。

で、**5節**『私はあなたの純粋な信仰を思い起こしています。そのような信仰は、最初あなたの祖母ロイスと、あなたの母ユニケのうちに宿ったものですが、それがあなたのうちにも宿っていることを、私は確信しています。』これも示唆していることは、テモテがちょっぴり弱気になって不信仰に陥っていた。だからもう一度原点に立ち返って、あなたには純粋な信仰が与えられているのではないか。それはあなたのお婆ちゃんロイス、あなたのお母さんユニケにも見られるもので、それをあなたは継承しているはずなんだ。私はそれを確信している。あなたは今その確信が揺らいでいるかもしれないけれども、私は確信していると、パウロは力強くテモテを励ましているわけです。で、この“純粋な信仰”という言葉は**第1テモテ1:5**（『この命令は、きよい心と正しい良心と偽りのない信仰とから出て来る愛を、目標としています。』）では同じ言葉が使われていて、そこでは“偽りのない信仰”と訳されています。純粋な信仰とは偽りのない信仰。本物の信仰、リアルな信仰ということです。だから、あなたはこの信仰に立たなくてはいけない。お婆ちゃんとお母さんから受け継いだこの信仰に堅く立たなければいけない。この信仰があれば、あなた

はこの難儀を乗り越えることが出来るんだと。お婆ちゃんのロイス、彼女の名前の意味は“感じの良い。感じの良い人。”英語では“agreeable”“pleasant”です。また、お母さんのユニケの名前の意味は“良い勝利”です。“good victory”です。テモテのお父さんはギリシャ人であることが知られています。これは**使徒 16 章**に書いてあります。異教徒でありました。ですから、お婆ちゃん、お母さん、そしてテモテは三代目のクリスチャンということです。恐らくロイスとユニケはパウロを通して救われていたと思われます。ですからいずれにしてもロイスとユニケ、彼女たちはパウロから信仰を受け継ぎ、そしてそれがテモテへ受け継がれ、テモテはパウロにとってはもう我が子と同然ということです。霊的な父親はパウロだったということです。で、その信仰をお婆ちゃん、お母さんから受け継いだわけですが、信仰の継承が如何に大事なのか、ここからも教えられます。皆さんの子どもたちはイエス・キリストを知っているでしょうか。知っているだけじゃなくて、イエスと共に今も歩んでいるでしょうか。昔は教会に行っていたんですとか。今でも時々聖書は開くようですとか。たまにはクリスマスぐらいには教会に来ることもありますとか。それではいけません。しっかりと純粋な信仰。偽りのない信仰を継承していく必要があります。「うちの子はクリスチャンホームで生まれ育ったんです。だから信仰をしっかりと持っています。」本当でしょうか。それは偽りのない信仰でしょうか。それは純粋な信仰でしょうか。それとも身勝手な信仰でしょうか。自分なりの信仰でしょうか。自分で勝手に作り上げた信仰でしょうか。私たちが残せる遺産。その中でかけがえのないものがこの信仰というものです。いつまでも残るものは信仰と希望と愛です。お金よりも、土地よりも、名声よりも、もっと大切なものがあります。天国に持っていけるものです。天国に持っていけないものを残したって何の意味もありません。ですから、却ってこの地上でしか通用しないもの、天国に持っていけないものを残すことでその子どもたちが信仰を持っていないならば、その目に見えるものは却ってない方が良くらいです。残さないほうが良くらいです。もちろん神様が目に見える物質的なものも祝福として私たちにエンジョイするように与えては下さっています。で、それをあなたの子どもたちにそのまま継がせていくのも、これも素晴らしいことです。アブラハムがイサクに対して、イサクがヤコブに対して、沢山の財産を残しました。でもそれ以上に価値のあるものは、信仰の父と呼ばれるアブラハムが残したその信仰であります。信仰がなければ神に喜ばれないんです。ですから、人が喜ぶものでも、この世が喜ぶものでも、あなたの子どもや孫が喜ぶものでも、神に喜ばなければそのようなものは残す意味も価値もないということです。純粋な信仰です、偽りのない信仰です。教会籍を残す、教会員のメンバーシップを残す。そんなものは何の意味もありません。「代々うちはクリスチャンの家系です。教会員のその名簿にも名前が残っています。」何の意味もありません。もしその人が生きた信仰、純粋な偽りのない信仰を今も持っていなければです。クリスチャンの有名な家系だろうと、何の意味もありません。純粋な信仰がなければ、偽りのない信仰がなければ、価値がないということを知って頂きたいと思います。あなたはこの価値のある信仰をしっかりと子どもたちに、孫たちに伝えているのでしょうか。そのために人生を費やしているのでしょうか。死ぬ時に後悔して欲しくありません。お金も土地も残さないけど、これだけはあなたに残せる、これをしっかりと受け取ってもらいたい、バトンタッチしていつてもらいたい。最期はそのようにこの世を去って欲しいと思います。「お父さんが、お母さんが、おじいちゃんが、お婆ちゃんが、どんな信仰を持っていたか分かりませんか。彼らの信じている神様なんて、そんな大した神様じゃない。だって神様よりも彼らはお金を愛していたから。お金を頼りにしていたからとか。神様を第一として歩んではいなかった。結局自分が一番だった。自分中心に生きていただけ。教会に通ってはいたようだけれども、聖書も毎日読んでいたようだけれど。」でも子どもたちはよく見えています、孫たちはよく見えています。あなたの信仰が純粋なものかどうか、偽りのないものかどうかよく見えています。ただのスタイル、ただの見掛け倒し、見て呉れだけのクリスチャン、名ばかりのクリスチャンかどうか、彼らはよく知っています。そんなものを彼らは欲しいとは思いません。是非、テモテに継承させるような、そういう信仰をまずは私た

ちが持たなくてははいけません。

で、6 節『それですから、私はあなたに注意したいのです。私の按手をもってあなたのうちに与えられた神の賜物を、再び燃え立たせてください。』信仰も揺らぎ、良心も揺らいでしまっていた、そのテモテに対して注意したいと。かつて私が按手した、パウロがテモテを召し抱えたその時です。テモテの内に燃えたった神の賜物。賜物は、“カリスマ”という言葉です。“ハリス”という『恵み』に“マ”が付いて、『恵みが目に見える形で現れたもの。』それが“カリスマ”『賜物』という言葉です。恵みの現われですから、人間が努力して勝ち得たものではありません。聖書を一生懸命読んで、祈って、そして教会で一生懸命奉仕して、その結果獲得できた。これが賜物だと思ったら大間違いです。沢山献金して買い取ったものじゃないんです。これは恵みによって、本来受けるべきでない者が神に与えられた素晴らしいギフトであります。でも、それが今冷え切ってしまっているわけです。それを燃え立たせて欲しい。再び火を点けてもらいたい。何がこの神の賜物を冷却してしまうのでしょうか。少し前の**第1テモテ4:14**を見て下さい。『**長老たちによる按手を受けたとき、預言によって与えられた、あなたのうちにある聖霊の賜物を軽んじてはいけません。**』示唆されていることは、テモテは原点を忘れて、聖霊の賜物よりも人間の知恵とか人間の力、聖霊主導ではなくて人間主導、神中心ではなくて人間中心のミニストリー・牧会を展開しようとしていたわけです。組織力をもって、人との人間関係を、信頼関係を構築することによって、いろんな人脈を頼りながら、いろんな人の専門的な知識や技術を取り入れながら、何としてでも教会をうまくまとめよう。円滑に運営しよう。聖霊の賜物を全く軽んじてしまっていたということがうかがえます。**ゼカリヤ4:6**に書いてある通り『**すると彼は、私に答えてこう言った。「これは、ゼルバベルへの主のことばだ。『権力によらず、能力によらず、わたしの霊によって。』と万軍の主は仰せられる。**』と言われてますが、私たちもいつも忘れてはいけません。権力によらず、能力によらず、神の霊によって神の働きはなされるべきなんです。決してこの賜物を、このギフトを軽んじてはいけません。テモテの弱さ、テモテを襲った誘惑、これは私たちの内にも見られるものです。

で、**第1テサロニケ5:19~20**も今度開いて頂きたいと思います。『**御霊を消してはなりません。**(消すというのは、火のようなイメージですね。聖霊の火を消してはいけないと捉えることが出来ます。) **20 預言をないがしろにしてはいけません。**』と続きます。テモテに対するメッセージと重ねて頂きたいと思いません。神の賜物を再び燃え立たせなさいと。聖霊の火を消してはいけない。長老たちがあなたに按手したとき、パウロもその長老の一人として按手したわけですが、預言の賜物もそこには見られたはずであります。でも、それが下火になってしまった。それが冷え切ってしまった。冷めてしまった。軽んじられるようになってしまった。その原因は一体何でしょうか。いろんな原因がもちろん挙げられるでしょうけれども。テモテに関しては特に文脈を見て頂くと、**第2テモテ1章6節**のその直後に『**神が私たちに与えてくださったものは、おくびょうの霊ではなく、力と愛と慎みとの霊です。**』霊というのがもちろん聖霊で、霊的な力、霊的な賜物。それが**6節**で言われている神の賜物のことでもあります。実際のところ**7節**のところには、原文には接続詞が使われております。日本語ではその接続詞は書略されてしまっていますが、原文にはちゃんと接続詞が使われているので、**6節7節**にはちゃんと繋がりがあがる。文脈で捉えることが明確に分かるということが言えるわけです。英語の聖書ではその接続詞を“for”という言葉で表現しています。ギリシャ語では“gar”という接続詞。意味は『**ですから**』です。

で、**8節**にはちゃんと訳出されています。**8節**の頭に“ですから”、ギリシャ語では“gar”と同じです。**7節**にも“ですから”が使われているんです。“ですから”、“ですから”と続いているんです。日本語であまり“ですから”という言葉の連呼すると、しつこく聞こえて文章としてよろしくないということで、勝手に省略してしまっています。でも、この勝手に省略することが、いつも致命的だと私は思っていますので、敢えてここで紹介させていただきます。他にも省略されているところが沢山ありますが、時間がないのでここ



だけ一つ指摘しておきたいと思います。7節には『(ですから) 神が私たちに与えてくださったものは、』6節からの繋がりです。いつの間にかあれだけ燃え立っていたあの神の賜物、あのスピリットは冷却してしまった。『(ですから) 神が私たちに与えてくださったものは、おくびょうの霊ではない』そのおくびょうが、その気弱さが、御霊を消してしまったんだと。おくびょう、恐れ、それが原因だったわけです。テモテにおいては特に恐れ。人を恐れると畏にかかるわけです。つつい長者たちの顔色を見ると。つつい人気取りをしている異なった教えをしている偽教師たちのあの姿を見ると。エペソの教会員たちは皆こぞって彼らになびいてしまう。自分から離れていつている。どうしよう。恐れがあるわけです。おくびょうになっているわけです。すっかり怯えて、怖気づいてしまっているわけです。それが原因となって、神の賜物が下火になって、くすぶってしまって。テモテは軽んじてしまっていたわけであります。恐れから中々この神の賜物を活かして、燃え立たせて、パワフルに、大胆に働くということは出来なくなってしまっていたわけです。恐れで躊躇してしまふ。恐れで大胆になれなくなってしまっている。この恐れは私たちににおいても致命的な原因となるということを知って下さい。あなたのお父さんお母さんに、あなたのおじいちゃんお婆ちゃんに、親戚のおじちゃんおばちゃんに、あなたの息子や娘や兄弟や姉妹や身近な人たちに、福音を宣べ伝える。大胆に語ろうとする。でも恐れてしまうわけです。顔色を見てしまうわけです。何を言われるか分からない。上司に対して部下に対して友達に対して同僚に対して。恐れてしまつてつつい足踏みをしてしまふ。つついものを言えなくなってしまふ。逆ギレされたらどうしよう。見捨てられたらどうしよう。縁切りだと言われたらどうしよう。戸籍から抜くと言われたらどうしよう。昇進できなくなったらどうしよう。解雇されたらどうしよう。恐れるわけです。おくびょうになるわけです。つついこの恐れから大胆になれない。後先のことを考えたり、自分の立場を考えたり、失うものものことを考えたり、自分の評判が悪くなるのではないかというその恐れです。これは致命的です。これはハッキリ言って罪です。恐れることは聖書では罪です。恐れるなど言われているからです。命令されているんです。この命令に違反しているんです。恐れる人は命令違反しているんです。罪を犯しているんです。「私はいろんなことを恐れています。いろんな恐怖症をもっているんです。」罪です。是非知って頂きたいことは、私たちは聖書において黙示録 21:8『しかし、おくびょう者、不信仰の者、憎むべき者、人を殺す者、不品行の者、魔術を行なう者、偶像を拜む者、すべて偽りを言う者どもの受ける分は、火と硫黄との燃える池の中にある。(ゲヘナのことです。地獄のことです。) これが第二の死である。』と。地獄に落とされる。おぞましい、恐ろしい罪のトップリストに“おくびょう者”とあります。これは“恐れる者”という言葉であります。恐れることは致命的な罪です。地獄行きに相当する罪です。なぜならば、おくびょうな者は不信仰になるからです。おくびょうから、恐れから、信仰を失なうんです。燃え立っていた信仰もその恐怖心から冷めてしまうわけです。で、あなたは不信仰になり、そして不信仰な者は憎むべき者に成り下がっていくわけです。恐ろしい罪です。でも同時に非常に身近な罪であり、犯しやすい日常的な罪でもあろうかと思ひます。思ひ煩ったり、心配するのと同じように、恐れる罪です。「仕事を失ったらどうしよう。」思ひ煩ひ、恐れ。同種の罪です。「健康を失ったらどうしよう。人間関係を失ったらどうしよう。」お金を失ったら、あれを失ったら、これを失ったら、評判を失ったら、いろんな恐怖心を抱くわけです。いろんな思ひ煩ひを抱えてしまうわけです。そこからもっと明らかな罪が生まれていくわけです。私たちが受けたのはおくびょうの霊ではない。これを皆さんにも確認して頂きたいと思ひます。「私は元来、生来小心者なんです。」と。肉においてはそうかもしれませぬ。でも霊においてはそうではないということを知って下さい。イエス・キリストを知った今、あなたはもう小心者ではありません。あなたは今もういろんな恐怖症、そうしたものととらわれたり、振り回される者ではないということです。逆に言えば、クリスチャンは怖いもの知らずです。なぜならば、主を恐れているからです。主を恐れる者は、他の何も恐れませぬ。皇帝ネロを前にしても恐れませぬ。あなたを殺す者を前にしてもです。恐れなひ。神が私たちに与えてくださ

ったものは、パウロは、「“あなたに” 与えてくださったものは」とは言っていません。“私たち” にとっています。そういうことはパウロも含めてです。パウロもおくびようになるわけです。「でも、あなたも私もおくびよう者、小心者、弱い者、愚かな者、取るに足りない者、無に等しい者だけれども、でも私たちに力と愛と慎みとの霊が与えられているのではないか。だから奮い立て。」パウロは自分をそう言い聞かせているわけです。ネロにどんな目に遭わされようと。これからこの地下牢から出されて処刑されようとも。臆病風に吹かれている場合じゃない。力と愛と慎みとの霊がこの私に与えられているのだから。あなたにも与えられているのだから。だから今がどんな患難でもそれは乗り越えられる。どんな試練でも、脱出の道がある。それは軽い患難でしかない。ですから。いつも思い出して下さい。ですから神が私たちに与えてくださったものは、おくびようの霊ではなく、力と愛と慎みとの霊であります。力という言葉はギリシャ語の“デュナミス”。使徒1:8にも書かれている『しかし、聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。』その力です。聖霊の力、デュナミス。ダイナマイトの語源です。第1コリント2:4にもデュナミスが使われています。『そして、私のことばと私の宣教とは、説得力のある知恵のことばによって行なわれたものではなく、御霊と御力（デュナミス）の現われでした。』知的な懐疑主義者の口を封じるような説得力のある論破できるような、そのような知恵の言葉によるのではなく、御霊と御力（デュナミス）の現われによる。これがパウロの説教だったと、パウロの宣教だったと言っているわけです。このパワーを私たちは聖霊によって与えられます。だから大胆になれるんです。小心者も大胆不敵な者に変えられるわけです。この聖霊の力を帯びたものは大胆にどんな脅しを受けても、むち打ちされようとも、辱めを受けようとも、誰に対しても語れる者に変えられるわけです。

で、“愛” という言葉は『アガペー』です。ですからこれも説明が必要ないと思います。愛の霊を受けているわけです。愛のスピリットです。これもミニストリーにおける動機です。原動力は聖霊の力、デュナミスです。権力によらず能力によらず、神の霊による。そして動機は愛です。すべては愛から始まります。愛が無ければ、何をして、どんな立派なこと、高尚なことを成し遂げても、それは意味がない。価値がない。第1コリント13章に書かれているとおりです。この愛は御霊の実でもあります。ガラテヤ5章に書いてあります。“慎み” という言葉は詳訳聖書では、『均整のとれた心』英語の聖書では“sound mind” というふうに訳されています。又は『制御心』自制心のことです。『節制すること』“self control” というふうにも訳されます。第2テモテ4:5そこにもこの言葉が使われています。『しかし、あなたは、どのようなばあいにも慎み、困難に耐え、伝道者として働き、自分の務めを十分に果たしなさい。』どのようなばあいにも慎む。それが困難に耐えること。それが伝道者として働くこと。それが自分の務め・ミニストリーを十分に果たすことに欠かせないものだとされています。この“慎み” がないと、困難には耐えられなくなります。伝道者として働けなくなります。自分の務め・ミニストリーを十分に果たすことが出来なくなります。どのような場合にも慎むこと。均整のとれた心を持つこと。制御心を持って、自制心を持って、自制・節制していくということ。感情に振り回されないわけです。テモテは感情に大分振り回されていたと思われま。感情によってどん底に突き落とされ、感情によって信仰もグラつき、ミニストリーもままならない状態に陥っていたわけです。臆病風という感情ですね。気をつけたいと思います。この力と愛と慎み。神の働きを担う上で私たちも常に意識するもので、これは自分で獲得するものではありません。これは神の賜物だということも覚えたいと思います。ですから、神の賜物をもう頂いていると信じて、これを消さないように。あなたのうちにはもうあるんです。ないんじゃないんです。あるんです。ないならば、あなたは救われていません。ですから、あらためてイエスを信じて下さい。でも、皆さんはもう信じているはずですから、もう与えられているんです。私たちに、あなたも含まれているんです。『神が私たちに与えてくださったもの』は、これから与えてくださるんじゃなくて、与えてくださったものです。もうあなたは受け取っているんです。これはもうあなたのものなんです。それをあなたはしっかりと掴んで、放さ

ず、これを用いて欲しいと思います。自分の力じゃない。自分の愛じゃない。自分のセルフコントロールじゃないんです。意志の力じゃないんです。

で、今度は**8節**のところ『**ですから、あなたは、私たちの主をあかしすることや、私が主の囚人であることを恥じてはいけません。むしろ、神の力によって（デュナミスの力です。）、福音のために私と苦しみをともしてください。**』弱気になっていたテモテに対して、あなたは私ともに立ってもらいたい。私とともに最期まで神の働きを貫徹してもらいたい。テモテにとっては教会の中には反対者。教会の外には迫害者がいたわけです。特に皇帝ネロが迫害を激化させていたわけですので、つつい教会内外にあるものによって怯んでしまったわけです。燃え立たせる。時が良くても悪くてもみことばを宣べ伝えなさいと。

「中には都合のいい事を言うてもらうように、気ままに教師たちを、自分に都合のいい牧師たちを呼び集める者もあるだろう。でも、あなたは燃え立て。顔色を見るな。時が良くても悪くてもみことばをしっかりと宣べ伝えなさい。」これがパウロがこの手紙を通じて最期の最期まで言わんとしているメッセージであります。「私のように最期まで走り抜いて欲しい。途中で諦めないで欲しい。倒れたまま起き上がらずにいる、そういうことはあってはいけない。後ろ向きでもいいけないし、立ち止まってもいけない。しっかりと立って前進して欲しい。最期の最期まで走り抜いて欲しい。戦いはあるだろう。反対はあるが。内外から。教会の中からも外からも。でも、あなたは燃え立てと。あなたを支えるのはあなたの力ではない。神の力であると。あなたは神の愛を受けている。そしてあなたはこの神の愛を表すことが出来る。そしてあなたには慎みの霊も与えられている。これによって制御できるんだ。」と。

で、「主をあかしすることと主の囚人であるパウロのことを恥じてはいけない。」パウロはテモテが恥じていたということを行っているわけです。主をあかしすることを恥じていたんです。福音を恥と思っていたんです。パウロは**ローマの1章**でも「福音を恥とってはいけない。恥じてはいけない。」とっています。その結果、囚人となることがあっても恥じてはいけない。不名誉なことです。牢屋に入れられるということは。誰もが囚人になりたいと思わないわけです。でも、パウロは自らを主の囚人と言っています。主のために捕えられるならば、それも良いということです。この人といつまでも結婚しなきゃいけない。それは主の囚人ですから。誇りと思って欲しいと思います。恥じてはいけません。

で、**9節**『**9 神は私たちを救い、また、聖なる招きをもって召してくださいましたが、それは私たちの働きによるのではなく、ご自身の計画と恵みによるのです。この恵みは、キリスト・イエスにおいて、私たちに永遠の昔に与えられたものであって、10**それが今、私たちの救い主キリスト・イエスの現われによって明らかにされたのです。キリストは死を滅ぼし、福音によって、いのちと不滅を明らかに示されました。』**10節**までお読みしました。“恵み”という言葉がキーワードです。私たちはこの恵みによって救われ、恵みによって生かされ、恵みによって働くことが出来ています。神に仕えることが出来ています。聖なる招きという言葉がありますが、招きという言葉は召命、召しです。英語で言えば“calling”という言葉ですから、ミニストリーのことを言っています。救いもミニストリーも神の恵みによるものです。救いもミニストリーも神の恵みに対する応答であります。救われるために行いは不要です。救いを維持するために、失わないために、行いは不要であります。神の恵みに対して応答することです。これがミニストリーです。

「神が数え切れない程の恵みをこの私に与えて下さった。有り難い。こんな私に。こんな罪人の私に。分不相応な者にこんな過分な親切を。ただただ嬉しい。ただただ感動。ただただ感謝。これを何としても私の愛する主にお捧げしたい。この思いを何としてでも表したい。恩返しなど出来ない。御礼など出来ない。言葉に尽くせない感謝でいっぱいです。でも、それでも何とかこの恵みに応えたいんです。」それがミニストリーです。それが神の働きであります。全部恵みです。いつも恵みを忘れないで下さい。それは常にキリスト・イエスにおいて、とあるように、イエス・キリストの内に見られるものです。見いだせるものです。あなたがキリスト・イエスの内にあるならば、恵みはいつもあなたに注がれています。それは永遠の

昔から、あなたが生まれる前から、何の働きもしていない時から、あなたが何者でどのような人生を歩むのか、神はすべてあらかじめご存知の上で、承知の上で、恵みをもってあなたを救い、恵みをもってあなたを召し、恵みをもってあなたは神に用いられているわけです。

で、10 節にある“死を滅ぼす”という言葉も私はとても気に入っています。ヘブル 2:14 (『そこで、子たちはみな血と肉とを持っているので、主もまた同じように、これらのものをお持ちになりました。これは、その死によって、悪魔という、死の力を持つ者を滅ぼし、』)にも、死の力を持つ者を滅ぼすイエスの姿が記録されています。もちろんこの死というのは肉体の死のことを指しているではありません。霊的な死のことです。肉体はどうしたって朽ちます。誰もが肉体においては死にます。でも、イエスを信じる者は決して死なないという命の約束を得ているということをも 1 章 1 節で伝えただけです。ある意味肉体の死というのは、解放であります。病気から解放されるんです。死ぬことで、身体障害からも解放されるんです。その意味において肉体の死というのは、あわれみです。でも、すべての人はその死後の世界において、神の前に立って行き先が決定されます。永遠に死ぬのか、永遠に生きるのか、そのどちらかです。永遠に喜ぶのか、永遠に苦しむのか。イエス・キリストは死を滅ぼしてくださいました。イエスを信じる者は、不死の者となります。不滅の者となります。永遠の者となるわけです。第 1 コリント 15:51~58 のところもメモしておいて下さい。(『<sup>51</sup> 聞きなさい。私はあなたがたに奥義を告げましょう。私たちはみな眠ってしまうのではなく、みな変えられるのです。<sup>52</sup> 終わりのラッパとともに、たちまち、一瞬のうちです。ラッパが鳴ると、死者は朽ちないものによみがえり、私たちは変えられるのです。<sup>53</sup> 朽ちるものは、必ず朽ちないものを着なければならず、死ぬものは、必ず不死を着なければならないからです。<sup>54</sup> しかし、朽ちるものが朽ちないものを着、死ぬものが不死を着るとき、「死は勝利にのまれた。」とするされている、みことばが実現します。<sup>55</sup> 「死よ。おまえの勝利はどこにあるのか。死よ。おまえのとげはどこにあるのか。」<sup>56</sup> 死のとげは罪であり、罪の力は律法です。<sup>57</sup> しかし、神に感謝すべきです。神は、私たちの主イエス・キリストによって、私たちに勝利を与えてくださいました。<sup>58</sup> ですから、私の愛する兄弟たちよ。堅く立って、動かされることなく、いつも主のわざに励みなさい。あなたがたは自分たちの労苦が、主にあってむだでないことを知っているのですから。』) そこにも死に勝利されたイエスのことが書かれ、そして私たちは朽ちることのない新しい体を、携挙の際に一瞬にして頂けるという約束までされています。不死のものが死を飲み込んだんです。朽ちないものが朽ちるものを飲み込んだんです。私たちもキリストにあって死に勝利するものとなったわけです。死に勝利されたキリストを信じる者は全員死に勝利するという約束が与えられています。死を滅ぼしたのはイエス・キリストだけであり、孔子も、マホメットも、ソクラテスも、どんな偉人も、聖人も、宗教家も、英雄も、どんな権力者も、死を滅ぼすことは出来なかったんです。イエス・キリストだけです。死を滅ぼすことの出来る方。私たちは自分の命を預けたわけです。ですから、私たちはもう死ぬことのない者とされました。

で、11 節。『私は、この福音のために、宣教者、使徒、また教師として任命されたのです。』宣教者というのは、宣教師をイメージする言葉かもしれませんが、実際には宣言者とか、宣告者、告知者。王の布告をただ宣べ伝える伝令のことを言います。伝令官と言っても良いかもしれませんが。王から命じられたことをただ忠実に宣べ伝えるだけです。説明など要りません。単純に福音を聖書に書かれている通りみことばを使って伝えること。これが宣教者の務めです。誰でも出来ることです。王の王、主の主から伝えられていること、そのメッセージ、託された王の伝令をただ伝えるだけです。福音という良い知らせを伝えること、それが宣教者。

で、使徒はもう既に説明した通り、これは“遣わされた者”メッセンジャーです。特に特命全権大使という権威も帯びています。神の国の大使、キリストの国の代表として私たちは遣わされていますから、怯む必要はありません。あなたは王の王、主の主に遣わされているんです。そのためにあなたは、お父さん

お母さんのところに生まれたんです。そのためにあなたは、その家に遣わされているんです。その職場に、この町に遣わされているわけです。神があなたを遣わしていることをいつも覚えて欲しいと思います。

で、教師。これも単純にはみことばによって養い育てる者です。宣教者も使徒も単純に言われたことを伝えるだけですが、教師はそれを説明して、そしてしっかりと成長できるように説明したり、教え込むということをします。聖書が私たちを養うことは分かっていることです。霊的に成長したければ、私たちは聖書を学ばなければいけません。『**信仰は聞くことから始まり、聞くことは、キリストについてのみことばによるのです。(ローマ 10:17)**』『**人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばによるのです。(マタイ 4:4)**』『**みことばの乳を慕い求めなさい。(1ペテロ 2:2)**』とされています。だから私たちはこの聖書という言葉学ぶ必要があります。そして、私はそのために牧師として、教師として、皆さんに与えられているわけです。聖書 66 巻をバランス良く教えなければいけません。パウロはエペソの教会に対して、**使徒 20:27** で神のご計画全体を伝えるということを強調しました。(『**私は、神のご計画の全体を、余すところなくあなたがたに知らせておいたからです。**』) 聖書 66 巻余すところなくということ。主題説教やトピック別説教とは違うんです。主題説教、トピック別の説教ですと、どうしてもアンバランスになります。聖書全体を教えようとする時に説教者が、牧師が、あまり伝えたくない苦手なところもあります。「レビ記なんか、どう伝えようか。いびきになってしまうかもしれないから。」とか、「あまりお金の話はしたくないですね。」と。「什一献金とか、そういうことをハッキリ言うと人はもう教会に来なくなる。」とか。あまり負担のかかるようなこと、人気の無いようなトピックも聖書の中にはいっぱいあるわけです。それも教えなければいけないわけです。でも、トピック別だとそれを避けて人々が気になるようなメッセージ。「こういう話をすれば人は来てくれるだろう。今こういうのが現代のニーズである。」いろんなことに合わせようとするわけです。誘惑がありますけれども、教師はそういうことはしません。教師は「霊的に健全に育てて欲しい。」これは親としても同じことです。子どもにはちゃんと健全に育てて欲しい。だから好き嫌いがあってはいけない。ちゃんとなんでも食べれて、栄養バランスをもって健康体になって欲しい。それが羊飼いの願いであります。それが牧師、教師として召された私の願いでもあります。だから時には人気のないことも話さなければいけません。時には厳しいことも、辛いことも、皆さんにとって負担になることも伝えなければいけないわけです。また、異本ですと **11 節**の“教師”というところには、『**異邦人の**』を加えるものもあります。パウロは非ユダヤ人、異邦人にも、“gentiles”にも伝えるように、特別に召されたメッセンジャーだったわけです。

で、**12 節**『**そのために、私はこのような苦しみにも会っています。(宣教者、使徒、教師として働くということに苦しみも伴うということです。楽しいことばかりじゃありません。苦しみは避けられないと思います。王の伝令を伝えるのに苦しまなければいけないんです。良い知らせ、グッドニュースを伝えるのに苦しまなければいけないんです。みことばを教えるのに苦しまなければいけない。反対されるからです。馬鹿にされるからです。迫害されるからです。いろんなものを失うこともあるからです。)**しかし、私はそれを恥とは思っていません。というのは、私は、自分の信じて来た方をよく知っており、また、その方は私のお任せしたものを、かの日のために守ってくださることができると確信しているからです。』これはいつも私を勇気づける言葉です。“信じてきた方”とあります。“信じてきたこと”じゃなくて“信じてきた方”なんです。つまりイエス・キリストという個人的な方を知っているということを強調しているわけです。信じてきたこと、信じてきた教理、信じてきた神学ではなくて、“信じてきた方”イエス・キリスト。この方を個人的に人格的に親密に知っているということを、体験的に知っているということをパウロは強調しています。今置かれている状況において、地下牢において、この牢獄において、“信じてきたこと”よりも、“信じてきた方”の方がものを言うということです。皆さんが今置かれているその状況、がんじがらめにされ、鎖に繋がれ、閉じ込められて、まるで囚人であると。その時にものを言うのは、あなたが信じ

てきた“こと”じゃないんです。信じてきた“方”です。勉強してきたことじゃなくて、信じてきた方です。いざという時には、頭の知識は役に立ちません。心の知識です。救いの教理が人を救うのではありません。救い主が人を救うんです。ですから、**信じてきた方を知ること**。それが、あなたの置かれている境遇においてもの言うんです。力になるんです。助けになるんです。慰めになるんです。励ましになるんです。頭の中を一生懸命整理しようとするかもしれません。頭の知識ではなくて、心の知識。イエスとの人格的な交わり、繋がり。これがその時にはものを言うんです。本当に辛い時、大変な時は、勉強してきたことじゃなくて、信じてきた方がものを言って下さいます。そこに居るんです。近くに聖書がなくても、神のことばであるイエス・キリストがそこに居るんです。『お任せする』というのはギリシャ語で「パーラセケー」”paratheke”と言います。“パーラセケー”という言葉は金融用語で「預金する」という言葉であります。「委託する。」”deposit”という言葉です。あなたは自分の持っているもの、自分の命、自分自身すべてをこのイエス・キリストにお任せしている、委託しているわけです。すべての働き、全部イエスに任せ、そしてこのお方に委託するんです。預金するわけです。イエス・キリスト、この方が天国銀行の頭取です。地上のどんな金融機関を襲おうとも、第2第3のリーマンショックがあろうと、何にも影響を受けません。ですから、天国銀行の頭取のイエス・キリストにあなたはすべてを委ねて欲しいと思います。あなたの持てるものすべて、財産もすべて、イエスに委託して欲しいと思います。命も預けて欲しいと思います。必ずイエスが守って下さるからです。そのことを私は確信しています。皆さんは確信しているでしょうか。確信できれば、今の状況においてあなたは何も思い煩うことはありません。ローマの地下牢に居ようとヘッチャラです、平気です。

で、13節で『あなたは、キリスト・イエスにある信仰と愛をもって、私から聞いた健全なことばを手本にきなさい。』“手本にする”という言葉は第1テモテ1:16(『しかし、そのような私があわれみを受けたのは、イエス・キリストが、今後彼を信じて永遠のいのちを得ようとしている人々の**見本に**しようと、まず私に対してこの上ない寛容を示してくださったからです。』)では『見本』と訳されています。同じ原語です。“手本”も“見本”ももちろん同じことです。「模範」”example”という言葉です。パウロは我が子テモテに対して、いつもお手本になったわけです。見本を見せたわけです。模範を示したわけです。これはイエス・キリストが弟子たちを教えるスタイルでもありました。ただ口先だけではありません。身をもって手本を示し、見本を示し、模範をもって教えたわけです。牧師は常に模範をもって教えるべきです。親は常に模範をもって子どもを教えるべきです。祖母のロイスも母のユニケもお手本をもってテモテを霊的に育てたと思われます。パウロはテモテに対して見本を示したわけです。足を洗って、「このように仕えいなさい。」イエスのスタイルです。

で、14節。『そして、あなたにゆだねられた良いものを、私たちのうちに宿る聖霊によって、守りなさい。』“ゆだねられたもの”これは第1テモテ6:20でも使われていました。『**20テモテよ。ゆだねられたものを守りなさい。そして、俗悪なむだ話、また、まちがって「靈知」と呼ばれる反対論を避けなさい。**』これに惑わされること無く、このキリスト教の異端に、グノーシス主義といったものに奪われることがないように。これは聖霊によって守りなさいと言われていました。健全な言葉、健全な教理ということです。正統な教理、教え、福音です。それを歪めたり、それを差し引いたり、それを変質させてしまうような異端には注意して、そうしたものに奪われないように。そうしたものにあなたの救いの喜び、平安を奪われないように。聖霊によって守りなさいと。

そして15節。『あなたの知っているとおりに、アジャヤにいる人々はみな、私を離れて行きました。その中には、フゲロとヘルモグネがいます。』“アジャヤ”というのは、“アジア”ではなくて“アジャヤ”となっていますが、これは今日のトルコを指しています。そのトルコのアジャヤ州の州都がエペソでありました。ローマ帝国のアジャヤ州の都、それがエペソでありましたから、エペソは大きな町だったわけです。そのエペソ

教会の牧師がテモテだったわけですが、パウロが開拓して牧会した教会のメンバーの多くは、パウロが皇帝ネロに捕えられて、迫害されて、そして処刑されるという段になって白状にもパウロを見捨てて逃げていったわけです。パウロのもとを去っていったわけです。その中にはフゲロとヘルモゲネがいます。彼らは恐らくエペソ教会において名の知れた指導者だったと思われます。長老の二人だったと思われます。**第1テモテ1:3**では、そこでは違った教えを説く者。**第1テモテ4:1**では、惑わす霊と悪霊の教えを説く者。**第1テモテ6:20~23**では霊知という、グノーシス主義という異端的な教えを説く者。それがフゲロとヘルモゲネだったと思われます。そもそもパウロがエペソ教会をあとにする時、お別れのメッセージで、凶暴な狼が襲って来るんだと、**使徒20章29~30**にそのことが書いてあります。凶暴な狼が襲ってくる、荒らし回る。そしてそれは外からだけでなく、あなたがたの中からも現れると。教会の中からも、教会の指導者、長老たちの中からも現れる。それが恐らくはフゲロとヘルモゲネだったと思われます。この二人についてはここ以外には出てきませんから、これ以上彼らについて知ることは出来ません。ただ名前の意味は、“フゲロ”は「小さな逃亡者」名前に相応しい生き方をしています。“ヘルモゲネ”は「幸運な生まれ」又は「マーキュリーの生まれ」。“マーキュリー”というのはローマ神話のマーキュリー。水星のことをマーキュリーとも言います。偶像の名前です。マーキュリーの生まれ。異教の両親に育てられたことは間違いありません。この二人は名指しで断罪されています。実名を挙げられているわけです。永遠のことばであるこの聖書の中に、名前を永遠に刻まれてしまう。不名誉なことでもあります。永遠の汚点とされたわけです。「ちょっと厳しいじゃないですか。実名を挙げるなんて。」でもこれが牧師の務めだということを感じたいと思います。皆さんにも知って頂きたいと思います。危険な教えに対して、教会を混乱させたり、分裂させたり、汚染してしまうような、またイエス・キリストから引き離すような異端的な教えは、これは牧師として、羊飼いと注意して、そしてそういう教えを持ち込んでくる者たちの名前はしっかりと明確に名指しで言わなければいけないということです。そのような名指しで断罪されたフゲロとヘルモゲネは、かつては教師だったと思われますから、**ヤコブ3:1**に多くのものは教師になってはいけないと。なぜならば教師は格別厳しいさばきを受けるからですと、言われています。ですから、前回**第1テモテ**では、私は現代の教会の中に異端的な教えを持ち込む人たちの名前を実名で何人か挙げました。例えば、世界最大の教会を牧会しているチョー・ヨンギという人。彼が救われていないとは、もちろん私は思いません。それは神のみご存知です。ただその教えは破壊的であります。その教えは非聖書的であります。いくら世界最大の教会を牧会しているとはいえ、その教えはどんなものかはもう伝えましたから、繰り返すことはいたしません。また、ベニー・ヒンという人。アメリカの伝道者です。他にもいくらでも名前を挙げられますけれども、既にその名前は2つ挙げたばかりです。愚か者として永遠に名前を聖書の中に刻まれてしまう。有害な教え、教会にダメージをもたらす者として、異端的な教え、非聖書的な教えを教会に持ち込んだ者として、永遠に名前を刻まれてしまう。だから恐ろしいんです。だから多くの者は教師になってはいけないんです。よくよく注意する必要があります。間違っただけを教えるのはいけません。それは有毒です。毒なんです。毒すものです。毒キノコもしっかり識別しなければいけません。クサウラベニタケというキノコがありますが、それはシメジにそっくりだそうです。ツキヨタケ。ヒラタケとかシイタケに似ているそうです。ニガリクリタケ。ナメコとかクリタケとかナラタケにそっくりで、これらの3つはよく間違えて毒キノコとして収穫され、毒キノコとして食され、毒キノコとして売られてしまうもので、よく注意されているものです。「そんなキノコの名前を挙げるなんて、キノコがかわいそう。」とか思うでしょうか。「名指しでなんて厳しすぎます。」まあナンセンスに馬鹿らしく聞こえるかもしれませんが、実は同じことなんです。それは毒キノコなんです。「名前を挙げるなんてちょっとかわいそう。厳しい。人をさばいてはいけないと聖書に書いてあるじゃないですか。」その通りです。でも、毒キノコなんです。それを食べたら大変なことになるのです。ですからしっかりとそれは識別しなければいけない。

これはさばくことじゃないんです。識別と言っているんです。これには注意しなさいと。明確にどういうものか名前も挙げて、これには注意しなさいと。それがむしろ親切なことであります。それが当然責任ある者として成すべき責務であります。

で、最後に 16～18 節を読みたいと思います。『<sup>16</sup> オネシポロの家族を主があわれんでくださるように。彼はたびたび私を元気づけてくれ、また私が鎖につながれていることを恥とも思わず、<sup>17</sup> ローマに着いたときには、熱心に私を捜して見つけ出してくれたのです。<sup>18</sup> かの日には、主があわれみを彼に示してくださいますように。彼がエペソで、どれほど私に仕えてくれたかは、あなたが一番よく知っています。』最後にフゲロとヘルモゲネとは対比的に、オネシポロという忠実なエペソの教会員のことが挙げられています。彼の名前の意味は「益をもたらす」という意味です。名前の通りの人物です。フゲロ、ヘルモゲネとは正反対のことをパウロに対してしています。フゲロ、ヘルモゲネはパウロを見捨てましたけれども、オネシポロは最後の最後まで、自分の立場がどうなろうともパウロのそばにいて、パウロを最後まで励まし続け、支援し続けたわけです。彼は元気づけてくれたと。元気づけるというのは、ギリシャ語では「アナクスホー」"anapsucho"。"アナクスホー"という言葉は、英語では"refresh"と訳されていますけれども、直訳すると「熱をいやす」「涼める」「熱くなって異常に加熱したものを冷ます」熱冷ましということです。また「再び息を吹き込む」涼しい風を吹き込むような、暑い苦しい思いをしている人たちのその熱を冷ましてあげる。涼めてくれるような、涼風をもたらすようなそういう存在です。リフレッシュしてくれるような存在。それがオネシポロです。パウロは彼のことを、また彼の家族のことを大変喜んでいました。ですから、この手紙の最後、パウロの絶筆となる最後に彼の名前と家族の名前を出しています。家族のことに言及しています。オネシポロの家族によろしくと。4章19節にも彼の名前を見ることが出来ます。余程パウロにとって力となってくれた、最後の最後まで忠実に仕えてくれた。本当に彼の存在無くしては、パウロはこのような最後を迎えることさえ出来なかったと。それくらい高く評価していた人物です。天国に行ったら是非会いたい人物の一人です。オネシポロ。パウロがここまで絶賛した彼です。

で、興味深いことに彼は、このオネシポロは、パウロを“元気づけてくれ”とありますけれども、これは全部過去形で使われています。「元気づけてくれた。」そして、「恥と思わなかった。」で、17節では過去形で使われています。「捜して見つけ出してくれた。」過去形です。18節でも「どれほど私に仕えてくれた。」と、これは全部過去形です。原語では全部過去形です。元気づけてくれた。恥と思わなかった。捜して見つけ出してくれた。仕えてくれた。全部過去形です。つまり、オネシポロは既に過去の人となっていたということです。もう既に亡くなって死んでいたじゃなくて、天国に引っ越していたということです。

で、そのオネシポロの家族によろしくと、4章19節でもう一度言ったわけですが、『かの日には、主があわれみを彼に示してくださいますように。』と、これは他に類を見ない非常に特別な、ユニークな表現・ことばです。私はこの学びを通してあまり以前は心にも留めなかったですけども、でもこのことばが飛び込んできました。『かの日には、主があわれみを彼に（オネシポロに）示してくださいますように。』事実は、もうオネシポロは既に死んでいるんです。天国にもう行っているんです。天国に引っ越しているわけです。その彼に、あわれみを示してくださいますようにと。パウロはこのオネシポロが死んだあとに、このことを願っているわけです。“かの日”という言葉は、すべてのクリスチャンがかの日にはイエス・キリストと顔と顔を合わせます。で、その時には“キリストの御座のさばき”に立つわけです。これは罪を定めるさばきではなく、この地上でイエスの名において成したことを評価する、表彰台における報いを受けるさばきのことを、“キリストの御座のさばき”と言います。これも皆さんよく聞いていると思うので、聖書の箇所だけ知らない方はメモして後で確認をして下さい。第2コリント5:10（『なぜなら、私たちはみな、キリストのさばきの座に現われて、善であれ悪であれ、各自その肉体にあってした行為に応じて報いを受けることになるからです。』）キリストの御座のさばき。罪定めさばきではなくて、報いを算定す



るさばき。第1コリント3:11~15も(『<sup>11</sup>というのは、だれも、すでに据えられている土台のほかに、ほかの物を据えることはできないからです。その土台とはイエス・キリストです。<sup>12</sup>もし、だれかがこの土台の上に、金、銀、宝石、木、草、わらなどで建てるなら、<sup>13</sup>各人の働きは明瞭になります。その日がそれを明らかにするのです。というのは、その日は火とともに現われ、この火がその力で各人の働きの真価をためすからです。<sup>14</sup>もしだれかの建てた建物が残れば、その人は報いを受けます。<sup>15</sup>もしだれかの建てた建物が焼ければ、その人は損害を受けますが、自分自身は、火の中をくぐるようにして助かります。』)そのことを述べています。草や木やわらによるものは全部火で焼けて灰となってしまいますが、しかし宝石によるものと、火によっても朽ちないものは永遠に残るものです。永遠に残るもののために私たちはこの生涯を送っているのでしょうか。イエスの名において成すことは、全部天においてカウントされます。報われるものです。そのことをパウロは死んでしまったそのオネシポロのために祈っているわけです。『**かの日には、主があわれみを彼に**(死んでしまったオネシポロに)**示してくださいますように。**』キリストの御座のさばきにおいては主のあわれみが彼の上にあるようにと。死者のために祈っているように聞こえます。クリスチャンは死者のためにはもちろん祈りません。供養だとか冥福を祈るということは、クリスチャンはしません。なぜならば、天国はこの地上よりも遥かに素晴らしいところですから、逆に天国に行った人が私たちのために幸福を祈ってくれていると思います。天国に行った者のために敢えて冥福を祈るようなことはないわけですけれども、でも死者のためにパウロは祈っています。これはカトリックの人たちが死者のために祈ったり、ろうそくに火を灯したり、またはモルモン教徒が死者のために代わりにバプテスマを受けるとか、そういった異端的な教えとは全く違います。非常に珍しいユニークな表現です。私は以前はここには深く考えも思いも留めなかったんですけども、でもパウロは『**かの日には、主があわれみを彼に示してくださいますように。**』このように祈っても構わないということが聖書に書かれているわけですから、私たちもこのように祈って構わないわけです。祈ってその報いが増えるわけではありません。これも誤解しないで下さい。ただ、あわれみを示してくださいますように。そう祈って構わないということが言われてますから、私たちもクリスチャンのために、オネシポロのような人たちのために祈ることは出来ます。ですから、是非その時にその祈りは、私たちは死んでしまった者のために祈っているわけですけれども、神の目には時間の制約がありません。過去の人のために祈っても、神においては永遠の今のわけです。まあ実際に祈りによって神の決められたことが変更されるということはもちろんないわけですけれども、ただ祈りが永遠にも通用するという。またこのような主にあわれみを示してくださるような祈りは祈っても良いという祈りだということも知って頂きたいと思います。あわれみというのはこの学びの、**1章**のあいさつのところでも説明した通り、非常に大切なものだということです。神の働き人においてあわれみは欠かせないということは伝えただけでありました。それくらい主のあわれみは生きている間も、そして死んだ後も必要なものとして、大切なものとしてパウロは強調しているということも教えられたと思います。あわれみ深い者は幸いです。その人はあわれみを受けるから。八福の教えでイエスが教えております。説いております。オネシポロはあわれみ深い者だったと。だから彼はあわれみを受ける者となるわけです。そのようなあわれみが私たちにも必要だということを最後覚えて頂いて、次回**2章**で今度は恵みによって強くなりなさいとパウロはテモテに対して語ります。楽しみにしてまた**2章**を先に読んできて下さい。そして最後のパウロの絶筆となった、遺言となった**第2テモテ**を、私たちに対する最も大切なメッセージとしても受け止めつつ、学びを続けていきたいと思えます。